



長野県 まちづくり・ボランティア フォーラム 2021

(日本地域福祉学会 関東甲信越静部会地域福祉セミナー)

～学びから実践へ 協働で取り組む“まちづくり”～



福祉の心
ふっころ
長野県社会福祉協議会
公式キャラクター



はじめに

地域を支える、まちを盛り上げる、こんな地域にしていきたいと思ひ描く…。そんな思ひを持った住民が暮らしの中で学び、気づき、動き出す。

動く人同士の出逢ひが重なり合ひ、豊かなまちづくりが広がっていく。

私たちは、ボランティア・市民活動や、地域福祉、社会教育の仲間たちと、学びから地域づくりを実践しながら、人口減少や高齢化、様々な担い手不足、つながりの希薄化などの地域の諸課題と前向きに向き合ってきました。

このフォーラムは、新型コロナウイルス感染症の影響や気候変動に伴う災害の多発化など、先の見えない不安の中で、ともすれば挫けそうな気持を抱える今だからこそ、まちづくりをテーマに分野を超えて学ぶ場を創りたいというボランティア、地域福祉、社会教育関係者の思ひから今年度、初めて開催したものです。

完全オンライン開催とはなりましたが、県内外から、150名を超えるご参加をいただき、ちょっとだけ未来を見通しながら、身近なまちの事例に学び、どきどきわくわくを発見し、手づくりで実践するボランティア・スピリットを確認して協働の輪を広げていく。そんな学びと出逢ひが生まれる場になったと思ひます。

雪の舞う長野で生まれた、ほっとな学びと交流の一日のレポートをぜひお楽しみください。

令和4年3月
まちづくりボランティアフォーラム2021実行委員会

長野県まちづくり・ボランティアフォーラム 2021 開催概要

(日本地域福祉学会 関東甲信越静部会地域福祉セミナー)

～学びから実践へ 協働で取り組む“まちづくり”～

1. テーマ

学びから実践へ 協働で取り組む“まちづくり”

2. 趣旨

地域を支える、まちを盛り上げる、こんな地域になっただけいいな…。そんな思いを持った住民が暮らしの中で学び、気づき、動き出す。動く人同士の出逢いが重なり合い、豊かなまちづくりが広がっていく。

私たちは、ボランティア・市民活動や、地域福祉・社会教育の仲間たちと、学びから地域づくりを実践しながら、人口減少や高齢化、様々な担い手不足、つながりの希薄化などの地域の諸課題と前向きに向き合ってきました。しかし今、新型コロナウイルスの影響や気候変動に伴う災害の多発化など、先の見えな

い不安の中で、ともすれば挫けそうな気持ちを抱えています。

このフォーラムは、そんな中だからこそ、分野を超えてまちづくりを学ぶ場を創りたいという、ボランティア、地域福祉、社会教育関係者の思いから生まれました。ちょっとだけ未来を見通しながら、身近なまちの中で学び、どきどきわくわくを発見し、手づくりで実践するボランティア・スピリットを確認し、協働の輪を広げる、そんな学びと出会いの場になることを期待します。

3. 主催

社会福祉法人長野県社会福祉協議会

4. 共催

日本地域福祉学会関東甲信越静部会、長野県生涯学習推進センター、
長野県社会教育委員連絡協議会

5. 後援

長野県、長野県民生委員児童委員協議会連合会、長野県生活協同組合連合会、長野県NPOセンター、
長野県長寿社会開発センター、信州くらしの支えあいネットワーク(順不同)

6. 期日

令和4年2月5日(土) 10時～18時30分

7. 参加方法

Zoomによるオンライン及び長野県総合教育センター（スタジオ）

8. 参加者

- (1) ボランティア・地域活動に関わる方（ボランティアグループ、地域支え合い組織等）
- (2) 地域の課題解決に取り組む方（NPO法人、社会福祉法人、企業等）
- (3) 地域の活性化や地域おこし（コミュニティビジネス、コミュニティデザイン等）に取り組む方
- (4) 地域の自治活動等に取り組む方（自治会役員等）
- (5) 社会教育や公民館活動に関わる方（社会教育委員、公民館関係者等）
- (6) こうした取り組みに興味・関心のある方
- (7) 行政職員（地域福祉、高齢者支援、障がい者支援、子育て支援、社会教育、生涯学習、公民館、都市まちづくり、文化財、地域振興課、産業振興、観光振興、住民自治組織支援、地域おこし協力隊などの担当者等）
- (8) 教職員（小・中・高・特別支援学級、大学・短大・専門学校等）
- (9) 社会福祉協議会（ボランティアコーディネーター、生活支援コーディネーター、地域福祉コーディネーター、福祉活動専門員等）

9. 事務局

長野県社会福祉協議会まちづくりボランティアセンター

電話 026-226-1882 FAX 026-227-0137

メール vcenter@nsyakyu.or.jp

長野県が全国に誇る公民館や社会教育の活動と、少子高齢化の中でますます重要になっている福祉の地域づくり、まちづくりに関わる人たちが集い、協働をテーマに学び、交流するために初開催された本フォーラム。コロナ禍により、Zoom 配信で行われました。午前中は話題提供と基調講演を実施し、午後はAとBのセッションに分かれ、どちらも自由に視聴ができるプログラムとしました。

10:00 開会・話題提供
▼ ～社会教育と地域福祉の協働による
"まちづくり"の可能性～

暮らしの基礎となる"まち"。その中では、多様な価値観、多彩な活動がごちゃまぜで存在し、お互いを理解し尊重し協働しています。社会教育と地域福祉の出会いがどのように"まちづくり"に発展するか。それぞれの立場から思いや課題等を共有し、本フォーラム参加にあたっての話題を提供します。

【話題提供者】

小池 玲子さん(長野県社会教育委員連絡協議会 会長)
山岸 久美子さん(安曇野市社会福祉協議会 係長)
傳田 清さん(NPOホットライン信州 信州子ども食堂ネットワークスタッフリーダー)

【コーディネーター】

加山 弾さん(東洋大学 教授)

10:30 基調講演
▼ ～東日本大震災から10年
復興と地域づくり、
持続可能な未来をつくる学びの力～

多くの尊い命を失った未曾有の大災害から10年。被災地では地域の再生と未来に向けて復興が進んでいます。時をさかのぼり、第二次世界大戦、敗戦国となった日本を再建しようと建設されてきた公民館。現在も地域の学びの場、住民自治を支える拠点として運営されています。その後、高度経済成長を経て、災害、少子高齢化、経済格差による貧困、さらには新型コロナウイルスなどに直面しながらも地域住民の学びと対話から生まれるボランティア・スピリットによって地域は成り立っています。このような日本の歴史、地域の歩みから、改めて地域の持つ大きな力をボランティア・地域活動、住民自治の在り方や価値から捉え、持続可能な未来を考えます。

【講師】

天野 和彦さん(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任教授)

12:00 昼休憩(動画上映)
▼ ～信州共生みらいアイデアコンテスト
実践ステップ編
福祉のイノベーション
「ふくし×若者×企業・団体」～

福祉・介護分野のイノベーションの促進をテーマに、若者と企業がタッグを組み、ICTを活用した福祉・介護の課題解決にチャレンジする「共生みらいアイデアコンテスト」の参加作品を動画で紹介しします。
・工業高校生が考える避難したくなる避難所マップ
・障がい就労支援事業所のWEBショップを女子高校生がプロデュース等

13:15 セッション1
▼

A: 公民館とボランティアセンターの協働
～つなぐ・つながる おもしろさの発見～
B: 誰一人取り残されない地域づくり
～災害時に支え合える仕組みをみんなで作る～

14:40 セッション2
▼

A: 地域活動・ボランティア活動を考える
～コロナ禍のピンチをチャンスに～
B: 子どもの居場所をつくる、支える
～お店、ボランティア、公民館…子どもを中心に広がるつながり～

16:05 セッション3
▼

A: 学びと出会いからはじまる豊かな地域づくり
～社会教育、福祉教育でヒトがつながる地域がつながる～
B: 若者の自立を支える
～児童養護施設と地域がつながる・見守る仕組みをつくらう～

17:25 まとめ
▼ ～垣根をこえて、協働を進めていくためには～

18:30 閉会

話題提供

「社会教育と地域福祉の協働による “まちづくり”の可能性」

初開催となる「まちづくり・ボランティアフォーラム」の参加者の
出会いを深めるためのヒントを共有します。

【コーディネーター】加山 弾さん（東洋大学 教授）



大切なのは、お互いに話して思いを共有し、共感すること

【話題提供者】山岸 久美子さん（安曇野市社会福祉協議会 係長）

社協職員として思うことは、地域の皆さんの普段の暮らしの幸せや笑顔のためには、人と人や活動をどう
いうかたちでつないでいくかが大事だということです。
そこで、それぞれの組織や活動に関わる異なる立場の
人がどういう思いで取り組んでいるか、会って話して
思いを共有し、共感することで協働していけると感じ
ています。

人と人とのふれあいや会話は社協がずっと大切に
してきたことですが、制限があるコロナ禍の今だからこ
そ、新たな人とつながるチャンスです。そのためにも、
会議後の雑談の時間が大事です。各自の肩書きを取
り払って本当の思いを話せる場なので、そこから一緒
に取り組んでいこうと盛り上がるのが多々あります。
それを上手にかたちにしていくことが大切です。また、

ときに、新しいことをやろうとすると「それは社協がや
るべきなのか」という声が上がることがありますが、社
協がやってはいけないことは人を不幸にすること、も
うひとつは、困っている人を見過ごすこと。それ以外
のことは、何だってやっていいと考えています。

今日は様々な協働の事例を聞きますが、そもそもど
んな思いでどのように共有し、共感したか。そこを、
TTP = 徹底的にパクってほしいと思います。



20数年前に専業主婦として子育てをして
いた頃、社協の広報誌のイラスト制作を
依頼されたことがきっかけで某市町村社
協の職員に。その後、安曇野市社協職
員に。未経験から実践を重ね、県内初
のボランティアコーディネーション力検定1
級を取得。

社会教育が目指すのは、人づくり、つながりづくり、地域づくり

【話題提供者】小池 玲子さん（長野県社会教育委員連絡協議会 会長）

私が携わっている「社会教育」とは「教育」に「社
会」がついた大きな生涯学習です。その中での社会教
育を、私はみんなが豊かに暮らしやすい社会をつくっ
ていくために必要なことを学ぶ教育だと説明していま
す。目指すのは、人づくり、つながりづくり、地域づく
りです。

人づくりは、子どもの頃から、人を慈しむ心を育み、
人を大好きになってほしいという思いです。心根の良
い人を増やしていくと、社会が生きやすくなると思
っています。今、それぞれの市町村社協では、コロナ禍
で、生活に困っている人、生きづらさを感じている人、
引きこもりの問題、いろいろな課題を抱えていて、大
変な時期だと思います。私たちは、そうならないよう
な社会をつくっていかなければいけません。それには、

やはり幼い頃からの学びが必要で、社会福祉と社会
教育が一緒になって手を携えていかなければいけませ
ん。また、今は多様な方々が暮らす中で、どうしても何
かにつけて文句を言ったり、人を攻撃することが増え
てきたように思います。その背景には、個人のつらい
思いや事情があるかもしれず、それは子どもの頃からの
積み重ねかもしれないという思いを巡らせながら、
見守っていきたいと思います。



平成12年児童育成団体「しがっ子クラ
ブ」を立ち上げ、長野県子育て支援員、
応急処置普及員の資格を取得。平成
16年諏訪市ボランティア・市民活動セ
ンター運営委員にも就任。諏訪市防災委
員となり、防災士の資格取得、長野県自
主防災アドバイザー令和2年諏訪防災
ネットワークを設立。

様々な団体や個人と手を組み、地域温度を上げて笑顔をつくっていく

【話題提供者】 傳田 清さん (NPO ホットライン信州・信州子ども食堂ネットワーク スタッフリーダー)

私は約10年間、児童養護施設で勤務していました。その中で児童虐待されて入所する子どもが多かったことから、入所の前段階で虐待防止が地域でできないかと考え、施設を退職して独立し、子どもの居場所づくりの活動に取り組んできました。それが「信州Gプロジェクト」です。Gとは元気とご縁のGです。しかし、これはあまりに大きな問題で、考えれば考えるほど深みにはまっていくため、出た結論は、地域を温めて笑顔をつくっていくことにフォーカスを絞ること。そこで、少子高齢化や共働き世帯の増加など、なかなか家庭での思い出が作りづらい状況の中でも、子どもたちに記憶に残る1日をプレゼントしたいという思いで「子ども祭り」というイベントを展開してきました。しかし、祭りが終わったらまた地域が冷めてしまうので、継続支援として、地域の子どもの高齢者などいろいろな方がつながる場所「だがしやG」を中野市内につくりました。今は4年目になり、市外からの利用者も含め、累積8000人以上に利用していただいています。

その関わりの中で、NPO ホットライン信州の「信州子ども食堂ネットワーク」との出会いがありました。子ども食堂は、もともとは貧困サポートでスタートしていますが、現在は地域がつながる場所の役割を果たしています。そこで、地域コミュニティのプラットフォームとして非常に必要性が高いと感じ、今は子ども食

堂のスタッフリーダーとして、長野県内で展開される120カ所ほどの子ども食堂のサポートをしています。

その縁から、中野市ボランティア連絡協議会の副会長など、いくつかの役を任されていますが、結局、どの団体も「地域を良くしたい」という目的は一緒だと感じています。今、コロナ禍で小学校の各イベントが中止されていますが、スポンジのように様々な知識や経験を吸収する子どもにとって、2年という期間は大きな損失です。そこで、社協や公民館、NPO団体など、志や目的がしっかりしている団体や個人と手を組み、掛け算式の出会いで、より地域の温度を上げてみんなの笑顔をつくっていけば、長野県も変わっていくと思っています。その一環として、現在は長野県社協とも組みながら、児童養護施設卒園生支援プロジェクトも進めていて、今後の展開を楽しみにしています。



中野市出身。児童養護施設飯山学園に約10年間勤務。子どもの居場所づくりを目指して退職後、地域支援の収入基盤をつくるため、広告代理店として起業。2017年に非営利団体信州Gプロジェクト設立。児童虐待の防止活動や子ども祭りを企画し、「だがしやG」等の居場所を立ち上げる。

持続可能な暮らしを続けられる地域社会であり続けるために

3人のメッセージに共通しているのは、社会教育、地域福祉といっても、やはり同じベクトルに向かって、地域や社会を良くしていきたい、人を大事にしたい、つながりをつくり続けたい

という思い、目指すところは同じだということです。やはり、子どもたちを事件や事故から守りたいという思いに異論のある人はいないでしょうし、災害や高齢化などを考えると、持続

可能な暮らしを続けられる地域社会であり続けたいというところは同じだと思います。その上位の目標のもとに一緒に取り組んでいける機会を増やしていけたら、と感じています。

加山 弾さん

関西大学社会学部卒業。地域における社会的孤立・排除の問題事象を構造化し、コミュニティワークによってどのように解決しうるかを中心に研究。また、最近では、実践家の方々と共同で、コーホート分析などを用いて“既存のフレーム”で看過しがちな問題の把握(地域アセスメント)について研究を行っている。東日本大震災後は県外避難者への支援と地域住民との関係形成(コミュニティづくり)促進にも取り組んでいる。



基調講演



～東日本大震災から10年、復興と地域づくり、持続可能な未来をつくる学びの力～

講師：天野 和彦さん

(福島大学つくしまふくしま未来支援センター特任教授／災害社会学専攻・一般社団法人ふくしま連携復興センター代表理事)

多くの尊い命を失った未曾有の大災害から10年。被災地では地域の再生と未来に向けて復興が進んでいます。時をさかのぼり、第二次世界大戦、敗戦国となった日本を再建しようと建設されてきた公民館。現在も地域の学びの場、住民自治を支える拠点として運営されています。その後、高度経済成長を経て、災害、少子高齢化、経済格差などに寄る貧困、さらには新型コロナウイルスなどに直面しながらも地域住民の学びと対話から生まれるボランティア・スピリットによって地域は成り立っています。

このような日本の歴史、地域の歩みから、改めて地域の持つ大きな力を、ボランティア・地域活動、住民自治のあり方や価値から捉え、持続可能な未来を考えます。

天野 和彦さん

1959年生まれ、福島県出身・在住。特別支援学校の教員として15年間障害児の教育に携わる。1997年大玉村教育委員会に派遣社会教育主事として配属。生涯学習の推進と成人式の改革など青年教育を中心に実践を行う。その後、男女共同参画に関わる機関や団体、個人の県内ネットワーク構築を手がけるとともに、全県的な生涯学習の推進を図る。

2011年の東日本大震災では県内最大規模といわれた「ビッグパレットふくしま避難所」の県庁運営支援チームの責任者として常駐。その後もセンター長を務めた「おだがいさまセンター」を

モデルとして、仮設住宅・みなし仮設住宅・県外避難の支援の仕組み構築と他市町村への水平展開に携わる。

2012年より福島大学つくしまふくしま未来支援センター特任准教授。2015年よりみんぶくネット(3.11被災者を支援するいわき連絡協議会)総括、復興支援プロデューサー。2017年より現職。被災者の生活支援、コミュニティ形成、要援護者サポート、ボランティア組織の連携、震災関連死などの調査・研究や現場での支援にあたる。

安心して暮らせる地域とは、 みんなが幸せになること

今日いただいたテーマは、この大会のテーマにもなっていますが、「学びから実践へ。協働で取り組む地域づくり」です。そこから私も大きなテーマを掲げました。「東日本大震災から10年、復興と地域づくり、持続可能な未来をつくる学びの力」というタイトルで、お話をさせていただきます。

まずは、ジョン・レノンの楽曲『イマジン』をお聞きください。実は、追い追いつながりがわかってくると思いますが、この『イマジン』が今回のテーマに関連する非常に重要なものになってきます。

そして、改めて「学ぶ」を考える上で、ひとつ資料を持ってきました。私が福島県の教育委員会に勤めていた時代に、詩人の谷川俊太郎さんをお願いしてつくっていただいた「学ぶ」という詩です。特に終わりから二つ目の連にご注目してご覧いただきたいと思います。

改めて「学ぶ」とは何かということ、皆さんと一緒に考えたいと思って、谷川俊太郎さんの詩をお届けしました。近年「安心して暮らせる地域とは何か」ということがよく取り沙汰されます。私は、わが国の最高法規である日本国憲法第13条の「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由および幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」という、いわゆる幸福追求権だと考えます。私には何人もの法律家の仲間がいて、彼らの解釈はそれぞれ違うわけですが、少なくとも私は法律の専門ではないものの、この幸福追求権を「人は誰もが幸せになるために生まれてきた」と解釈しています。つまり、安心して暮らせる地域、あるいは社会とは何か。それは、みんなが幸せになることだと思うのです。それは理想ですが、その理想に向かって歩くために、こうして今生かされていると思っています。

そのために必要な力がイマジネーション、想像力です。先ほどの『イマジン』の歌詞のひとつに「You may say I'm a dreamer But I'm not the only one I hope someday you'll join us And the world will be as one」とあります。非常に有名な歌なので、皆さんおわかりかと思いますが、このサビの部分では「人は、お前は空想家だという。でもさ、そんなふうに思っているのは僕ひとりではないで

「学ぶ」 谷川俊太郎

あなたは学ぶ
空に学ぶ
空はすでに答えている
答えることで問いかけている
わたしは学ぶ
土に学ぶ
隠された種子の息吹
はだして踏みしめるこの星の鼓動
あなたは学ぶ
木に学ぶ
人からは学べぬものを
鳥たちけものたちとともに学ぶ

わたしは学ぶ
手で学ぶ
石をつかみ絹に触れ水に浸し火にかざし
愛する者の手を握りしめて
あなたは学ぶ
目で学ぶ
どんなに見開いても見えぬものが
閉じることで見えてくること
わたしは学ぶ
あなたから学ぶ
わたしとは違う秘められた傷の痛み
わたしと同じささやかな日々の楽しみ
わたしたちは学ぶ
本からも学ぶ
知識と情報に溺れぬ知恵
言葉を越えようとする言葉の力を

そうしてわたしたちは学ぶ
見知らぬ人の涙から学ぶ
悲しみを分かち合うことの難しさ
わたしたちは学ぶ
見知らぬ人の微笑みから学ぶ
喜びをわかちあうことの喜びを

(ふくしま学習空間「夢まなびと」に寄せて)

しよ。きっと多くの人たちが思っているよね。考えてみて。いつか僕らが本当に一緒になったら、この世界がひとつになるよ」ということを歌っているのです。この“学ぶ”ことと“創造力”が、今日のお話のなかですと底流にあるものだと思って紹介しています。

ある福祉事業者でのふたつの事例をご紹介します。いずれも、福祉関係のスタッフの体験談です。

(1) 眠れなかった昨日の出来事

いわゆる「狭間」の支援が必要な方がある機関につなぎ、そこから紹介された窓口にその場で通された。あらかじめつないでくださっていたことに感謝してその席に着くと、担当の方が来て本人の話聞き、そしていきなり説教のような話をした。

啞然。

横にいて口を挟みたかったが、本人のための面談なのでグッと堪える。しかし聞いていると、どうも同行している私も暗に責められている。

「誰にここにこいって言われたの？ 誰に勧められたの？」

「相談して、こういうところがあるよって紹介されて知ったので…」

「なるほどね」

会ってものの数分でのこの言葉。この人の何を知ってのその言葉なのだろう。困っていなかったらここには来ない。困っているから、本人がずっとひとりで悩み続けて、同じところをぐるぐる回り続けて来たことを知ったからつないでいるのに。

一見、何の問題もなさそうに見えるが、本人は一生懸命周りに合わせようと努力して来てのそれであって、自分の違和感や不安が拭えない。それがわかってもらえず、長く外に出られない期間もあった。しかし「甘え」と言われ、プレッシャーを感じながら自分が悪いんだと自責で追い込んでしまう。「自分なんていても仕方ない」とまで言っていたのが、面談を重ねてやっと目を見て自分の気持ちを話せるようになった。

しかし、それを一から話したところで、この方にそれが伝わるだろうか。「いくつなの？」と歳を聞いて、自分とひとつしか違わない、といったときのその意味は？ 経験した人でないとその人の立ち場はわからないかもしれないが、せめて、なぜこの人はここにいるのか考える気持ち、何があるのか気遣う気持ち、察しようとする気持ちはないのか。

言うことを言って担当が入れ替わり、別の直接の担当の方が席に着いたら、その方は穏やかに本人の話に耳を傾けてくださり、本人の希望に沿った提案をしてくださってだいぶ救われた。本人もこの方なら、と思った様子だった。

退出してから場所を移して振り返り。本人は「もっとひどいことを言われたこともあって、そのときは泣いてしまったけど、今日は落ち着いて聞けました」との言葉にさらに胸を突かれる。

こういう「わかってもらえない」悩みを抱えた人は、目の前のこの人の向こう側に、潜在的にいっぱいいるのだろう。世の中それが普通だろ、という社会の厳しさも現実だが、生きづらさを押し殺してなんとかやり過ごしている人はどれだけいるのかと考えさせられる。それが耐えられなくなると、もっと救うのが難しくなる。

昨夜は自分自身が悶々としてしまい、眠れなかった。信頼している機関からのつなぎだったのでなおさらショックだった。どうやってこの乖離を埋めようか。

(2) ある介護者の書き込み

前に、頑張ってお風呂に入ったおばあちゃんの話を書いたけど。実はあの日、娘さんが迎えに来て早退。次の日の夕方、入院したと連絡が。先週の金曜日に、退院したから月曜日から利用したいと。えー。大丈夫？ 食べられるようになった？ 歩ける？

ケアマネからは、まだ食べられないし歩けないから車椅子対応、トイレは全介助と。娘さんからは、食べられています、頑張れば歩けていますと。うーん、どっちだ？

昨日。久しぶりにお会いして。思っていたより元気だし、歩けてる。ちょっと安心した。お風呂入るときに「今日は久しぶりだからシャワーにしてって言われてるから、シャワーでいい？」と聞いたら「入ったらダメなの？ わたしはやっぱり入りたいなあ」って。

「入りたいの知ってるー。なら、頑張ってみる？ お手伝いするよ！」って、今までと同じ通常入浴ができました！

お湯に入ったとき、涙を堪えているように見えたから、あたしもらい泣きしないように見ないようにしてただけど。お風呂上がって脱衣所の椅子に座ったとき、堪えてた涙をぼろぼろしながら「わたし頑張ったね。お風呂入れたね。あなたに会いたくて、ま

たお風呂に入れてもらいたくて頑張ってきたんだよ。ありがとうね」って。うん。あたしが泣かないわけない。もう、コンタクトどっかいつっちゃうくらい、あたしもぼろぼろ涙出てきて「おかえりー。待ってたよー」ってぎゅーしちゃったよ。

明日、またあたしがお迎えに行きます。笑顔がたくさん見られるといいな♡

このふたつの事例を読んで考えていただきたいのが、社会教育の現場でも社会福祉の現場でもよく使われる“寄り添う”ということです。寄り添うことの本当の意味は一体なんなのか。私は何かしらの素晴らしい回答を持ち得ているわけではありません。だからこそ、皆さんがたと一緒に考えたい。寄り添いというのは一体どういうことなのか。

“モノの防災”から “考えかたの防災”へ

話を進めます。東日本大震災のときの避難者は50万人でした。そして、今11年目を迎えています。いまだに福島県の避難者は4万人を超えています。長野にも、皆さんがたの温かい支援を受けながら、今もなお避難生活を送っている人がいます。10年経っても、そういう状況にあります。

それから、2016年に起きた熊本地震は、避難者が18万人でした。実は熊本地震が起きたとき、災害の研究者や災害支援の実務家は、誤解を恐れずに言いますと「わずか18万人程度の災害だから、これまでの災害の教訓や知恵を生かせば、ほどなくして解決するに違いない」と。ところが、いまだに熊本では仮設住宅があります。

この写真を見てどう感じますか？



1930年11月 北伊豆地震避難所（毎日新聞社提供）

避難所となっている長野市内小学校体育館の様子（2016年10月17日）
写真提供：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会

私たちは、ざわざわしたんです。なぜならば、今後予測されている災害は桁が違うから。首都直下の避難者の想定は700万人です。南海トラフの大地震においては、広域ですから950万人です。東日本大震災の50万人でさえ、あるいは熊本地震の18万人でさえ、われわれはどうしていいのか今もなお思い悩んでいるのに、700万人とか950万人といたら、どうしたらいいですか。だからこそ私たちは、やはり東日本大震災からもっともっと学んでもらうように発信をしていかなければならないし、熊本からも、あるいは平成30（2018）年7月の豪雨災害があった岡山県倉敷市真備からも、あるいは北海道胆振東部地震からも、もっと学ぶ必要がある。あるいは2019年の長野では、台風19号のさなか、どういう思いをした県民がこの長野にもいらっしやっただか。もっともっとわれわれ自身がそこから教訓を学んで、その知見を周囲に広げていくことを誓い合わないといけない。今日はそういう場だと思っています。まさに“モノの防災”から“考えかたの防災”へと切り替えていかなければならないと思っています。

ジャーナリストの池上彰さんはとても素晴らしいかたで、ご承知のかたも多いと思いますが、ニュースをわかりやすく解説していただきます。2年ほど前、その池上さんが防災の番組をやるというので、私は興味を持って見ていました。ところが、ちょっと残念でした。なぜかという、相変わらずモノの防災なんです。1日水が何L必要で、食料が何日分で…ということです。モノだけあれば命が救われるのか。もちろん、モノがいない、備えがいないということを行っているわけではありません。もちろんモノは必要です。でも、その前に、考えかたがないとダメなんだろうと思うんです。

そこで、先ほどの、災害で苦しんでいる人に“寄り添う”とは、どういうことか。それに対してわれわれ一人ひとりが答えを持っているべきです。「教科書に書いてあるから」という言葉ではなく、自分の言葉で、それが語られるようになっていくこと。少なくともここに参加している私たちは、最低でもそれがスタートラインに立つときに大事な力なんだろうと思うのです。まさに“モノの防災”から“考えかたの防災”に、シフトしていかなければならないと思うわけです。

そう思うようになったきっかけの写真をご覧に入りたいと思います。この写真を見てどう感じますか？左側の写真は、今から90年前、1930年の北伊豆



地震の避難所です。床があって、布団が持ち込まれて、皆さんがお休みになっている。そして、立っている男性は寝間着を着ているように見えます。そして右側の写真は2019年の台風19号災害の長野市内の小学校の体育館の避難所です。違いはどこにありますか？

これは私の授業でもやっていますが、うちの学生は真面目だから、一生懸命考えて「左が白黒で、右が…」って。そうだけどさ、そういうことではないんです(笑)。違いがないんです。見た通り、変わっていないんです。つまり、90年前の避難所と今の避難所がほとんど同じ環境だということです。

皆さん、どう思いますか？率直に聞きたい。日本では、災害に遭って苦しんでいる人たちにこういう環境しか提供できないの？なぜ？国が貧しいのか？日本のGDPはアメリカ、中国に次いで世界第3位でしょ。では、どうしてこういう状況なのか。それがきっかけで、この避難所から、災害関連死、震災関連死が生まれています。それに、その後の生活再建において、スムーズに移行できない状況があります。なぜですか。もっともっと今の状況をよくするために、もちろん現場での支援も必要だけれども、私は運動も必要だと思っています。

そのためには、先ほどから社会教育の話が出ていますが、学びが必要だと思っています。実は新型コロナウイルスが流行する前年、イタリアでは被災者支援の考えかたが違ुरしいと聞いて、行って確かめてきました。イタリアでは、早ければ災害が発生してから24時間以内、遅くとも48時間以内に、今からお見せする3つのものが届きます。

1つ目はトイレです。日本の避難所のトイレと大きく違うでしょう？日本の避難所のトイレは、よく工事現場に置かれている仮設トイレです。使ったかたはわかるでしょうが、あれは臭いがきつくて、その臭いが嫌で息を止めて入ると、苦しくなって余計に後で息を吸っちゃったりして(笑)。大変なことになるわけです。ところが、このイタリアの避難所のトイレを見てください。車椅子のマークが付いていて、ユニバーサルデザインです。だから、洗面所でも車椅子のまま入って手を洗うことができます。

2つ目はキッチンカーです。1台で1時間に1000食分が調理できます。配られるのは、アルファ米やお弁当ではない食事です。私が調査に行ったときに食べたこの写真は、イタリアのレストランで食べたものではなく、避難所の食事です。ショートパスタにパルメザンチーズがかかっている、シーザーサラダやフランクフルトの大きなソーセージ、ポテトフライがあって、赤ワインと白ワインもありました。私は、避難所で酒を飲ませろと言いたいわけではありません。イタリアでは普通に食事のときにワインを召し上がるかたが多いんです。つまり、わかりやすくいうと、被災者支援の考えかたが違ुरんです。イタリアでは災害が起きても、できる範囲のなかで、災害前の生活を途切れさせないんです。だから、食事にしても、トイレにしても、悲しい思いをなるべくさせない。食事は、寒いときには温かいものを、暑いときには涼やかな食べ物を提供されます。だから、災害前はワインを普通に飲んでいたので提供されます。

誤解のないように言います。私は、イタリアがよくて日本がダメだという話をしていてのではありません。考えかたが違ुरというところに、われわれは何を学びますか、ということをお願いなんです。イタリアの仕組みをそのまま日本に持ってきても、必ずしもうまくいくとは限りません。住んでいる人の気質も、歴史や伝統や文化も違いますから。けれども、先ほど見た90年前の避難所の写真と、今の避難所は変わらない。そこにわれわれは何を感じるかということです。

そして、3つ目に届くのはベッドです。コットといわれる折りたたみ式ベッドで、日本のアウトドアショップでも売られています。それが、ほどなくしてベッドに差し替えられます。

トイレ、キッチン、ベッド、頭文字を集めるとTKBです。遅くとも、これが48時間以内に届くということです。つまり、これは被災者がどういうふうに関わ

れなければならないかを示しています。でも、これは私だけが言っているわけではありません。実は「スフィア基準」という国際基準になっています。ご承知のかたも多いかもしれません。「スフィア基準」とは「人道憲章と人道支援における最低基準」とされています。つまり、災害援助を、施しではなく権利として捉え直しています。上から目線で困っている人たちに配るということではなく、災害援助は権利だと書いてあります。つまり、避難者はどう扱われるべきかを、個人の尊厳と人権保障の観点から示しています。まさに、ここも考えかたの防災です。

人権とは、誰もが人間らしく幸せに生きる権利

今出てきた「人権」という言葉を、少し考えてみたいと思います。人権は「人」という字が入っています。そもそも人間って何？ という話です。私は、人間の価値はものすごく幅が広くて深いものだと思っています。例えば「明日10時集合ね」といったときに、だいたい10時10分くらいに来るような、おおらかな人がいらっしやいますよね。「あの人がいると、なんとなくゆったりしていいわ」という長所がありますが、短所は、物事を気にしないから集合時間は「だいたいでもいいじゃん!」というところです。一方で、細やかな人もいます。例えば、集まりを持つと、ご自分の漬けた漬物を持ってきたり、頼まれもしないのにお茶を入れて出してくださるようなかたは、周囲から「あの人はすごく細やかで配慮してくれるところがいいけど、細かくて嫌だ…」といわれたりする。どちらも人間の価値で、おおらかと細やかなの両面を持った人はいません。つまり、人間はそれほど、全ての価値を身につけることができないくらい幅が広くて深いんです。

われわれ人間は、今生きていますが、皆さんに「今日より明日、ほんのわずかでもいい、不幸せになりたい人？」と聞いたら、誰も手を挙げません。当たり前です。でも、質問を変えて「今日より明日、ほんのわずかでもいい、幸せになりたい人？」と聞いたら、これは僕も含めて皆さん手を挙げます。もちろん、幸せの価値はそれぞれですが、それでも今この瞬間、誰もが幸せになりたいと思っています。つまり、最初の話に戻ると、誰もが「生まれてきてよかった」といえる人生を送りたいと思っています。例えば、どうしてこういう性別に生まれてしまったのか？ と悩む人がいるから、LGBTが人権の問題になります。ある

いは、自分はなぜあの土地に生まれてしまったのかと考える人がいるから、同和の問題が人権の問題になります。そして、なぜ私たちが災害に遭わなければならなかったのかと考える人がいるから、私は、災害を人権の視点で捉え直すことが必要だと思うわけです。

今出てきた「人権」という言葉。それは一体何かと考えてみると、誰もが人間らしく幸せに生きる権利だと考えることができます。さらに、私は「生まれてきてよかった」といえるような人生を誰もが送ることができる権利と自由、それを人権と思うのだと思っています。さっきも話した憲法第13条の幸福になる権利の追求。これは、僕は「人は誰もが幸せになるために生まれてきた」ということだと言いました。当たり前のようなことですが、だとしたら、みんな幸せになっているはずなのに、なっていません。災害、貧困、あるいはいろいろな差別のなかで苦しんでいる、性暴力でいまだに苦しんでいる人たちが数多くいるなかで、もう一度、私たちは「人は誰もが本当は幸せになるために生まれてきたんだ」ということを胸に刻む必要があるのではないのでしょうか。

孤独死、孤立死を防ぐ「交流と自治」

東日本大震災の今の福島の様子は、二重のくびきを受けています。ひとつは地震と津波。そしてもうひとつは原子力災害。このふたつのくびきがあったために、強制避難地域となって被災地に仮設住宅や避難所をつくるができなかったんです。だから、当初は復興どころか、復旧のスタートラインにさえ立て



ないとも言われていました。今の福島の復興の課題を問われれば、もちろん、インフラストラクチャ、つまりグラグラになった道や壊れた橋、建物を建て替えるなど、インフラの整備も大事だと思いますが、私はまちがいくら震災前より立派になったとしても、そこで生活を送る住民の心が丈夫ではなかったら本当の復興といえないのではないかと考えています。いまだに11年前の3月11日の日のまま、その場にうずくまって動けない人たちがいることを、私たちは忘れてはならないと思います。だからこそ、私が今、本当に課題だと考えるのは、一人ひとりの心を丈夫にすること、つまり心の復興です。人間の復興といっても過言ではない。本当に大事だと思っています。そういうさなかに、トリチウム処理水の問題や広域避難者の問題など、いろいろな問題が起こる。今もずっと引き続き、災害が続いているということです。

11年前、一体何が起きたのかをさらっとお話したいと思います。私は当時、自己紹介にもありますが県の教育委員会にいて、3000人を超える大規模避難所にいました。ひとつの村が突然、そこにできたようなものです。しかも、コミュニティが崩壊した状態で。そこで人が死ぬかもしれないと言われて行ったわけです。そこで何かしらのことをしなければいけない。真っ先に考えたのは、命を守らなければ、ということです。でも、産業振興のコンベンション施設、東京でいうビッグサイトのようなところに、コミュニティが崩壊した3000人以上の人たちがいて、どうやって命を守ったらいいのか。そのとき、私が思い出したのは、27年前の阪神淡路大震災です。たくさんの人たちが亡くなりましたよね。やはりあのとき、避難所の問題になって、今でもはっきり覚えていますけれど、連日報道で避難所を何とかしろ、被災者をいつまであんなところに置くんか、プライバシーがない、空気が悪いと問題になっていました。当時の行政の判断は間違っていたと思いません。なぜなら、未曾有の災害で、経験したことがなかったから。そこで仮設住宅をつくって、被災者の皆さんがたに移っていただきました。これで一安心と思った矢先に起きたのが、安心安全な仮設住宅でバタバタと人が死んでいった孤独死、孤立死です。1970年代に全社協が、いわゆる孤独死問題を取り上げて運動にしましたが、それが再びクローズアップされたのが、27年前の阪神淡路震災でした。ご記憶のかたもいらっしゃるでしょうが、私は当時、仮設住宅で自ら命を絶った人の遺書の全文を読んでいて、その

内容を今も覚えています。それは、私の記憶力がよかったせいではなくて、あまりにも奇妙な遺書だったからです。こう書いてあったんです。「もう一度、避難所に戻りたかった」と。おかしいじゃないですか。避難所が問題だといわれたのに、その避難所にもう一度戻りたいとって亡くなったなんて。ところが、東日本大震災の運営支援のなかで、その遺書の意味がはっきりとわかったんです。つまり、災害が起きると、多くのかたがたは避難所に足を運びますよね。それまで地域でご家族と一緒に暮らしていたかたはご家族で来られるし、おひとり暮らしのかたはいろいろな支援を受けるために避難所に来られます。その次のフェーズは、避難所から仮設住宅に移ります。ご家族で来られたかたは世帯用の仮設住宅に入りますし、単身のかたはひとり暮らし用の仮設住宅に入ります。でも、その当たり前のことが原因だとわかったのです。特におひとり暮らしの場合、仮設住宅は壁もあるし、鍵もかかるので安心安全ですが、黙っていれば1日中黙ったままなんです。つまり、避難所にいれば雑魚寝のような環境にあっても人の話し声が耳に飛び込んできますし、隣に寝ている人たちの息遣いや温もりを感じることができて、寂しくなかったんです。だから「もう一度、避難所に戻りたかった」という言葉を残して亡くなったかたは、本当は「俺はひとりぼっちだ、寂しい」といって死んでいったんですよ。だとしたら、支援の方向性はどうしたらいいのか。ひとりぼっちにさせない、寂しくなんかさせないという支援の軸にしなければいけないんです。それを言い換えた言葉が「交流と自治」です。交流の場の提供と自治活動の促進が人の命を守るということなんです。どうか皆さんがたにも、胸に刻んでいただきたい。「交流と自治」ということを。

喫茶店や足湯の 交流の場から生まれた自治

でも、どうやってコミュニティが崩壊した3000人を超える避難所のなかで自治をつくれればいいか。あるスタッフからは「100人ずつ分ける」というアイデアが出ました。そして、それぞれに班長を決めたらどうかと。それもひとつの方法ですが、それでは自治ではなくて管理になってしまいます。管理からは何も生まれないとすると、どうしたらよいか。

そうしたなかで、あの11年前の福島には、日本のあちこちで起きた災害を地域で支えたいろいろな人たちが続々と入ってきていました。雲仙普賢岳の噴

火や、阪神淡路大震災、全島避難の三宅島の噴火、それから福島のお隣、新潟県中越地方の山越の災害を支えたかたもいて、どうしたらよいかと彼らに聞いたんです。すると彼らは、足湯とサロンに効果があったと言っていました。たらいにお湯を汲んで入浴剤を入れて、足湯隊のボランティアがハンドマッサージやリラクゼーションを提供すると、被災者はいろいろな話をしだすようになるというんです。つまり、足湯といっても、実は傾聴ボランティアのひとつなんです。そして、被災者と支援者、ボランティア、あるいは被災者同士の交流が生まれ、表情をなくして笑顔を忘れた人たちが取り戻していくんです。はっきりとそう言えるのは、その様子を毎日見ていたからです。本当に月並みな表現ですが、人を救うのは、やはり人しかいないんだと思った瞬間でした。

サロンや喫茶店は、はじめは会議室にあるような長テーブルの周りにパイプ椅子を並べただけの場所を喫茶店としていました。当初は、みんな1日ゴロゴロ寝ているだけなので、つくっても来てくれるか疑問がありましたが、自治の手がかりがないのだからやってみるしかないだろうと、若いスタッフに頼んだんです。すると、彼らは巨大な物資倉庫に行って、緑茶や紅茶などいろいろなお茶の道具を見つけました。ところがコーヒーはインスタントがなくて、代わりに出てきたのは、喫茶店の本格的なドリップ

コーヒーのセットでした。若いスタッフが淹れかたに迷っていたら、中年のおじさんが起き上がってくるのが見えました。そして、準備しているところに近づいてきて、無言でコーヒーの道具を取り上げて淹れはじめたんです。ドリップコーヒーはいい香りがあるので、コーヒーをご馳走してくれるのかと次々と人々が起き上がってきて、スタッフが慌てて紙コップに入ったコーヒーを差し出すと受け取って、皆さん、腰を下ろしてコーヒーを飲みながら語りはじめました。そのときにコーヒーを淹れた人は、みんなから「マスター」と呼ばれるようになりました。さらに、マスターを手伝う人も出てきて、汚れたテーブルを拭いたり、紙コップがなくなると取りに行ったり。そのうち、喫茶店だから名前があったほうが良いということで、富岡町の避難所で町全体が桜の名所だったことから「みんなの喫茶さくら」という名前がつけました。さらに、お花の名前が付いた喫茶店だから花があったほうが良いと、毎日花を買ってきてくれる人がいて飾ったり。あるときには「マスター、これを使って」と、ふたつの大きな紙袋いっぱい陶器の瀬戸物のマグカップを持ってきてくれる人がいたり。いつも紙コップで飲んでいて味気ないということで、マグカップを使っておいしく飲もうというわけです。ほかに、あるときは5～6人の人たちが「みんなの喫茶さくら」に近づいてきて、毎日喫茶店に人が集まっ

■ 足湯の活動



■ サロンの活動



て来て床が汚れているからモップを貸してくださいといわれ、掃除をしてくれました。そうやって自治が生まれていったんです。どんどんと自分たちでできることが積み上がっていきました。そして、やがて喫茶店はこの避難所が閉鎖する8月過ぎまでに3店舗も生まれ、ダンボールの間仕切りだった避難所から、区画整理をして自治会がつけられました。その基盤になったのが、喫茶店や足湯の交流の場だったわけです。そして今でも、仮設集会所や復興公営住宅で、その自治運営が続いているんです。

この自治というのは、信濃の国でも最も大事にしてきたところだったのではないのでしょうか。だから、自治公民館が日本一多い県なんでしょう？ まさに福島この避難所でも、自治を大事にしたいと、足湯とサロンから交流の場をつくり出していきました。その交流と自治を保障し続けていくための仕組みとしてつくったのが「おだがいさまセンター」です。避難所が閉じられてからもこういう機能が必要だということで、郡山市のわずか100坪ほどの小さい建物でつくられました。以下が当時の組織図です。

真ん中の「住民の交流と自治を守り、コミュニティを再生する」というのが「おだがいさまセンター」のミッションです。立ち上げ当時は2年ほど、大学の仕事でセンター長と一緒にやっていましたが、小さな建物ながら、年間の利用者は4万人を超えてました。本当に人々の心の交流の駅のような場所でした。

11年前の福島の状況を整理すると、コミュニティが崩壊してしまった地域があり、人々がバラバラになっていました。人は寂しかったり希望をなくしたりすると死んでしまう。人はひとりでは生きられないと

いう姿を僕は見てきていたから、寂しくさせないために、交流と自治、活動の場が必要なんだと動いていました。それは、まさに絆という言葉で表現されていて、人と人がつながるといことが大事でした。

でもこれは福島だけの課題ではなく、全国どこでも同じなんです。例えば、考えてみてください。昨日の朝起きて、たったひとりでご飯を食べて、お茶を飲んで、テレビを見て、夜眠るまで誰とも言葉を交わすことなくひとりぼっちでいた人はいないんですか？ それが毎日だという人はいないんですか？ いるでしょう。われわれは福島の災害が起きたことで、人はひとりぼっちだと死ぬんだと思ってきたから、そうしないために、人と人がつながる仕組みをつくっていくしかないと思った。でも、全国でも同じ課題があるんです。まさに、地域コミュニティとは何かということです。地域というのはある特定のエリア、場所を指し、コミュニティとは、そこにおける人と人との結びつきのことをいいます。これをわれわれは絆といってきました。でも、それを煩わしいと思う人たちもいないわけではない。だから、場合によっては多くのNPOがそうであるように、「緩やかなネットワークを」といわれますが、まだ模索している段階です。でも、やはりつながっていかなければいけないという意味においては、協働がものすごく大事になってきます。まさに11年経った今でも、われわれは本当の意味での絆を取り戻す戦いのさなかにあると思うわけです。

「白馬村の奇跡」は本当に奇跡だったのか？

そんななかで、2014年に長野県で神城断層地震が起きました。震源地は白馬村ですよ。あのとき、マスコミのかたがたは「白馬村の奇跡」といってました。僕は「本当なのかな」と思って、すぐに白馬村に調査に行ったんです。だって、ニュースではいろいろなお宅が潰れてしまっ壊滅状態だったから。調査の質問はただひとつ。「『白馬村の奇跡』って、本当に奇跡だったんですか？」。堀之内区の前区長さんにインタビューをしたら「奇跡じゃなくて、やっぱり日頃の備えなんじゃないですか」とひとこと目言われてしまいました。どういうことかと聞くと、「やっぱり日頃からこういったものをある程度やっておくと、いざというときに役に立つんですよ。フォークリフトも、災害時にはフォークリフトを使いましょうなんてことはどこにも何もないわけなんですよ」と。つまり、

「白馬村の奇跡」は奇跡だったのか？①

奇跡じゃなくて、やっぱり日ごろの備えじゃないですかね。やっぱり日ごろからこういったものをきちんとある程度やっていくと、いざというときに役に立つんですよ。フォークリフトも、災害時にはフォークリフトを使いましょうなんていうことはどこにも何もないわけなんですよ。

地域の情報を地域の人たちが持っているということですよ。活用できる資機材もわかっているし、活用できる人材も、どこに誰がいるとか、この人に言っておけばここはとりあえず大丈夫だ、みたいな。(白馬村 堀之内区前区長・鎌倉氏インタビューより)

地域のコンテンツを地域で共有

夜中に災害が起きて、みんな大変な状況のなかで集会所に集まってきた。ところが、集会所に来ないお宅がある。「大変だ、どうなっている?」「潰れてます!」「誰かフォークリフト持ってこい!」と。集落のなかには、土建屋とかさまざまな職種のかたがいて、ジャッキアップして「どこに寝ていた?」「2階の東側に寝ていたと思います」と、それで救い出して、だから誰も亡くならなかったんです。これをもって、あれほどの大変な災害だったのに誰も亡くならなかったことから「白馬村の奇跡」と言われたわけです。でも、当時の区長さんは言っています。地域の情報を地域の人たちが持っていて、それを活用でき、人材もどこに誰がいるのか分かっていて、「この人に言っておけばここはとりあえず大丈夫だ」という地域のコンテンツを地域で共有しているということ。ここに教訓が見えてきます。

続いて「白馬村の奇跡は奇跡だったのか、パート2」です。役場の総務課に「今、区長さんから話を聞いてきましたが、役場として被害状況や全体の概要を掴んだのはいつだったんですか?」と聞いたら「朝です」と。僕は遅いと思いますが、でも役場や行政は避難所運営だけが優先順位が高いわけではなく、むしろもっとプライオリティが高いものがあるので、その通りですよ。そこで、朝になって役場が被害が大きかった地区に入った瞬間に、先ほどご紹介した区長さんから地図を手渡され、そこには「この地面にクラックが入っている」「この家が潰れた」「この橋はもうダメだ」ということが全部書き込まれていたそうです。びっくりして、災害前からそういう仕組みがあったのかと聞いたら、住民に困ったことがあったら区長に相談してもらい、区長が役場に行って話を

「白馬村の奇跡」は奇跡だったのか？③

自治会というのは何なのというのは、やっぱり、自分たちで治めると書くじゃないですか。自分たちでやることは自分たちでやるよ。だから、助けたこともそうなんです。我々の中でできることはやる。それ以上に大きいものは公助に頼む、そういうことでずっとやってきている。

(白馬村 堀之内区前区長・鎌倉氏インタビューより)

毎年更新していた災害時住民支え合いマップ

する、と。役場としても、村民にいわれたから対応するのではないので、区長が知らないことはダメだと言うんです。それなら「議員さんはいらないんじゃないですか」と聞いたら、「議員さんは区長さんと一緒に来るので必要です」と。災害前からそういう仕組みがあったんです。つまり、地域自治と行政がもともと深くつながっていたんだという教訓がまた見えてくるわけです。

そして、パート3です。区長さんに「そもそも自治会とは何ですか」と聞いたら、やはり「自治」は自分たちで治めると書くように「自分たちでやることはやるということだ」と。集落の人たちを助けたというのも、自分たちのなかでできることはやるということなんです。それで、自分たちの手に負えないものは公助に頼むということです。そういうことを昨日、今日ではじまったのではなく、ずっと続けてきている。だから、これは奇跡ではないんです。ある日、突然ミラクルが起きたのではなく、ずっとやってきたことなんです。

聞いたら、毎年、災害時の「住民支え合いマップ」を丁寧に作っていて、今年版と去年版をいただいたので「毎年更新してるんですか」と聞いたら「毎年更新しなかったら意味がないでしょ」と、ちょっと笑われてしまいました。毎年、亡くなる人も転入してくる人もいるわけですし、生まれる人もいます。毎年更新するのは当たり前だとおっしゃっていたんです。でも、多くの地域ではどうでしょう? 全国では、出来上がったことがゴールだと思っている地区もないわけではありません。それは今、白馬村のようなコミュニティが少なくなってきているといえるかもしれませんね。

福島の場合は、災害で少子化、高齢化が加速度的に進みました。そういう意味では、これからの日本で徐々に進行していく課題が、福島では災害が障害になって一気に進んでしまっ、課題先進地域といえます。わが国のコミュニティの現状は、少子高齢社会です。さらにこれが進むと、少子高齢化の進行が見込まれて、つまりコミュニティの危機なんです。限界集落は、福島もそうですが、長野の中山間地域では大きな問題だと思います。

地域社会の変化と新しい価値の必要性

その地域社会の変化とコミュニティですが、日本は1960年代から70年代に社会構造や地域構造が大きく変わりました。つまり、重化学工業を国策に掲げて一生懸命力を入れていこうといていた1960年代から70年代にかけて、まさにそれを背景にしながら高度経済成長を遂げてきたわけです。そんななかで、イタイイタイ病や水俣病など4大公害も生まれました。重化学工業を一気に進めてきたことによる弊害です。それによって生活環境が悪化したとともに、産業化、都市化、情報化が進んで、モータリゼーションや高速交通網が発達していきました。そのなかで生活圏が拡大し、科学技術やメディアも発達しました。その結果、これまでの伝統的な地域社会から、個別社会、核家族中心の社会に変わり、生活様式そのものが変化していきました。つまり、住民同士の結びつきが薄れていったんです。これは、私たち自身も実感しているのではないのでしょうか。地域は課題解決能力を失っていったのです。

そんななかで、社会の歪みはたいがい一番弱いと

ころに現れます。社会の基礎単位は家族であり、家族のなかの一番弱いところは子どもです。そこに現れてくるわけですが、それを見ていきます。

日本の伝統社会は昭和20年代ぐらいまで。つまり高度経済成長が始まるまでです。それまでは家父長家族といえますし、その象徴が、1950年代のいろりやちゃぶ台でした。そこから1960年代から70年代に入っていくと、産業社会です。核家族の象徴になったのが、ダイニングキッチンです。このとき、東京に団地が生まれました。それまで家族がちゃぶ台に座ってご飯を食べていたのに、椅子に座ってテーブルでご飯を食べるとするのはものすごい変化です。それがさらに1980年代になって迎えたのが、消費社会です。この頃、これまでの伝統家具がどんどんなくなって、カラーボックス文化が出てきました。古いものが捨て去られ、「消費は美德」とまでいわれた時代です。そして、核家族からさらに個室になっていく。つまり、分子家族です。さらに1990年代後半以降、情報社会になりました。携帯家族、スマホ家族です。実はこんな話をしていますが、わが家でも半年ほど前から驚くべき事象が生じてしまっています。私は自分の仕事部屋が2階にあって、そこにこもっていると階下から呼ばれても音が聞こえないんですが、あるとき、スマホが鳴って何かと思ったら「ご飯ができました」といわれました。日本の家族はどう変わってきたかという話をしているのに、わが家でも同じことが起こっていて、さすがに笑えないなと。それを家族にいったら「だって降りてこない人が悪いんでしょ」と。

現代の家族はどうなっているか。いくつかの作文を紹介します。お聞きください。

地域社会の変化とコミュニティ

1960年から70年代の地域社会の変化

その結果

ムラ型社会
(伝統的地域社会)

個別社会
(核家族中心の社会)

生活様式の変化→個別化した社会

住民同士の結びつきが希薄化し、地域は課題解決能力の喪失

日本の「家族」はどう変わってきたか



佐藤文香氏「一橋大学『メディアと家族』」参考

最初の作文は、小学5年生。書かれた時期は、1980年代初頭。日本がものすごく変わった時期です。歴史学者は絶対、今に1980年の初頭を再評価するときがくると私は思っていますが、どういう時代かというと、政治の分野でも、保守と革新だったところに中道という考えが生まれたのが1980年。社会党と公明党が社公統一（社公合意）といったのが初めてです。保革対立から真ん中という路線ができ、それが今の立憲民主党のような野党につながっているということです。それから、バブル経済も1980年代。さらに1980年代初頭、校内暴力、家庭内暴力が激化。若い人は知らないかもしれませんが、当時『3年B組金八先生』というドラマがあって、そのなかで「腐ったミカン」というエピソードがあって非常に有名でした。ときを同じくして1983年。任天堂ファミリーコンピュータ発売。あるいは、雑誌の浮き沈みが激しい現代、愛読者も大変に多かった『主婦の友』ですら廃刊に追い込まれるなか、いまだに元気に続いている『たまごクラブ』『ひよこクラブ』、つまりマニュアル雑誌は売れ続けていますが、創刊されたのは1983年です。本当に恐ろしいほど社会が大きく変わっていった時期です。その時期に、書かれた作文です。小学校5年生の『夕飯時』という作文です。

「みんなあまりお腹が空いていなかったから、母が焼きそばをつくりました。私はテレビで『ヤンヤン歌うスタジオ』を応接間で見っていたので、焼きそばをひとりで食べました。母たちは、お茶の間に『草燃える』というNHKの大河ドラマを見ながら食べていました。『ヤンヤン歌うスタジオ』が終わったので『俺たちは天使だ』を見ていました。食べながら見っていたので、机の上にこぼしました。」

わかりますね。テレビを中心とした、バラバラな家族の姿がそこにあります。もうひとつ作文を読みます。『いろりばた』という中学2年生が書いた作文です。書かれた時期が1950年代。つまり、今読んだ『夕飯時』から、たった30年前に書かれた作文です。

「いろりばた。夜飯を食ってから、みんないろりばたに集まった。そのとき、『おら、今度“いろりばた”という題で綴りかた（作文）を書く』といたら『綴りかたなんて書けるのか』と兄さんがわらじを編みながら聞いて言った。『書けるかな』と父ちゃんが言ったのでみんなゲラゲラ笑った。」

わかりますか。いろりを中心として、父ちゃんやお兄さんは夜なべ仕事をしている。この作文の書き手

は、そこで宿題の作文を書いている。いろりを中心とした家族の姿がそこにあるわけです。つまり、たった30年間で日本の家族はここまで変わってしまったということです。さらに、もうちょっと作文を読みましましょうか。

京都に奥丹後というところがあります。その奥丹後の中学生に、先生がたがアンケートを取りました。その質問のひとつに「お母さんから1日のうちで一番多く聞く言葉は何ですか」というものがありました。何ですか？一緒に考えてみてください。「早く」です。「早く起きなさい、早く顔洗いなさい、早くご飯食べなさい、早く支度しなさい、早く行ってらっしゃい」。帰ってきたら「早く宿題やりなさい、早くお手伝いしなさい、早くおやつ食べなさい、早くお風呂に入りなさい、早くご飯食べなさい、早く着替えなさい、早く寝なさい」。今のだけで12回です。1回では効かないですから、×3としたら36回。だいたい40回にしておきましょうか。計算してみてください。登校は220日。幼稚園2年、小学校6年、中学校が3年、高校も3年。だから、14年間で1日40回「早く」と言われ、40回×220日×14年です。数万回です。14年もの間ずっと「早く早く早く……」と、浴びせ続けられている、こういう状況に驚きませんか。

そんななかで作文を読みました。『植物園』という作文です。これは、休みの日のことを書きなさいというテーマの小学生の作文です。

「家族で植物園に行きました。バス停まで来ると、バスが来たので急いで乗りました。駅に着くと電車が来たので、走って乗りました。電車が混んでいたので、みんなで急いで座りました。お母さんが『早く植物園に行きたいわね』と言いました。駅に着いた

現代の家族はどうなっているか？

- ・いくつかの作文から・・・
 - 「夕飯時」「いろりばた」「植物園」
- ・食生活から見る家族の崩壊
 - 「まないたとお袋の味」「落としふた」
 - 「大学生と炊飯器」「死んだ猫」
- ・住宅から見る家族の崩壊
 - 「間取りと離婚」「居室？寝室？」



ので、急いで植物園に行きました。植物園に着くと、お母さんが『早くお弁当を食べましょう』と言いました。お昼を食べ終わると、妹が『つまらないから早く帰ろう』と言いました。お母さんも『本当につまらないところね…』というので、家に帰りました。家に帰ると、お母さんが『早く夕御飯にしましょう』と言って、ご飯を食べて早く寝ました。本当に忙しい1日でした。」

どうですか、休みの日の出来事ですよ。次に『お風呂』という作文です。

「僕がテレビを見ていると、お母さんが『早くお風呂に入りなさい』と言いました。お風呂に入って体を洗っていると『いつまで洗っているの、早く湯船に入りなさい』と言いました。湯舟に入っていると『早く出なさい』というので、洋服を着ていると、また『さっさと着なさい』と言われました。急いで着たので、シャツが裏返しになってしまいました。これを見てお母さんが『何をあわてているの？ 落ち着いてゆっくりしないからよ』と言いました。僕は何が何だかわからなくなってしまいました。」

どうですか、皆さん。今の家族というのが、どんなふうに変わってきてしまったのか。日本にコンビニエンスストアが、東京の江東区に生まれたのは1976年です。営業時間が看板になっていました。朝7時に開いて、夜11時までやっている。私たちは当時、驚きました。だって、お店が朝7時から夜11時までやっているんですよ。ところが、営業時間を看板にしているコンビニエンスストアは、今、有名無実です。その当時の営業時間を守っているコンビニでは、多分、営業的にはダメじゃないでしょうか。そんなふうに、今は社会全体がコンビニエンス化してきていま

す。

住民の安心安全な暮らしに向けても、今、多様な問題がそれぞれ家族のなかにも押し寄せてきている。高齢化による生きがいの問題もあるし、自治の問題、環境の問題、さまざまな問題が今、われわれを取り巻く環境にあって、それをどう解決していくのかを考えていくと、やはりコミュニティ組織が大事というところに行くわけです。地域が今、変化しているということをマイナスのように捉えているかたもいると思いますが、これを新しい価値でプラスに変えていくことはできないか。例えば、最近はおハスとか「歩いて暮らせるまちづくり」といっていますが、1950年代は歩いて暮らすしかなかったんです。でも、今の時代、全部車を止めて自給自足をやる…というのは無理ですが、その地域のなかで昔のよくあるガチガチの町内会のようなものではなく、もう少しゆるやかなつながりをつくれませんか。新しい価値を、私たち自身が生み出す必要があると思うわけです。

イタリアでも抱える 「目的外使用」の課題

そのなかで、先ほどのイタリアの災害支援における課題をお話しましょう。これはすごいです。アマトリーチェ村とオンナ村の仮設住宅に行ったんです。どちらもCASA住宅といって仮設住宅ですが、どう見ても「仮設」じゃないんです。耐震デッキや駐車場があって、日本と違う。エスプレッソマシンも支給されます。エスプレッソは必要だから。びっくりしたんですが、飲みたいものを聞かれて「コーヒーください」と言ったら「コーヒーはない。あなたが言っているのは、濁った水のこと?」と言われました。エスプレッソとカプチーノしかなく、あなたが言うようなコーヒーはないと言われて、カプチーノを飲みました。おいしかったです。つまり、エスプレッソマシンが支給されて常にあるんです。

さらに、全部が2ベッドルームの2バスルームで、全部支給です。内部に入ると、本も食器もあります。イタリアではこのような仮設住宅が、被災してから3カ月の間に全部できてしまうんです。軍を投入するし、イタリア全土で300万人という、ものすごい数のボランティアもいます。災害のために全部登録制になっているんですよ。3カ月間で、わっと入って、わっと仮設住宅をつくるまでやるんです。

このアマトリーチェ村の神父さんにヒアリングしま



した。このかた、40年間この地で教会を転々としてきたそうですが、話を聞いていたら、私は英語がわかりませんが、彼から「Hope less」という言葉が聞こえたんです。「Hope less」って希望を失っているということ？ そんなことはないでしょう。神父さんだよ…と思ったら、やはり通訳の人に聞くと「私は希望をなくしている」と言っていました。ええっ？ 信仰を持っている宗教者ですから、希望を与えるのが仕事なのになぜ？ と思ったら、こうおっしゃったんです。「災害後、崩れ続けるこのふるさとの風景を、私はずっと見続けなければならなかった。心も本当にボロボロになっている。だから、希望はないと思ってしまった」と。でも「教会はもともと交流の場ですが、今はみんなが集まらず、村民がバラバラになっているのなら、それぞれのところにアウトリーチで集会所をつくって、そこで私は説教をしに行こうと思う」と。素晴らしいですね。

さらに、オンナ村の仮設住宅に行ったときに、ヴァイオリニストである音楽家のパトリアさんにお話を聞いたんですけど、その後で隣家の住民の夫婦が遊びにきたんです。そうしたら、このお父さんが言うには「災害前までは自分の家に住んでいたけれど、鍵なんかかけていなかった。一歩外に出るとみんな歩いていて、おはよう、こんにちは、調子はどうだいと、そんなことを話していた。でも今、仮設住宅にいて、一歩外に出ても誰も歩いていないし、ベンチにも誰も座っていない。見るに見かねて、僕の息子が『だったら集会所も空いているから、週末バルをやるよ』と。じゃあ、僕は『市役所に行って、掛け合ってやるよ!』と言いました。市役所から帰ってきた息子に週末バルが決まったかと聞くと、『役所に相談し

たら目的外使用だと断られた』と言ったんです」と言うんです。

おかしいな、これはわれわれのそばのどこかでも聞いたことがある話だと、皆さんが思うでしょ。そうしたら、そのヴァイオリニストが「こういうときこそ支援が必要なのに」と言いました。それを見て、私は災害後も残るCSW（コミュニティソーシャルワーカー）が必要だと思いましたし、日本における課題との重なりも感じました。

自分たちのまちを安心して安全なものにするための自治

ここで、なぜ自治や自治会が必要なのかを考えてみたいと思います。俳優の小栗旬さんと山田優さんのご夫婦が町内会に入らない、ご近所トラブルを抱えているという週刊誌の記事を見てみます。この記事では「町内会はあくまで任意だ、入る必要性やメリットがどれほどあるのだろうか」と語っていたので、記者は勘違いしている！ と思ったわけです。なので、自治とか自治会はなぜ必要なのかを考えてみます。

今の僕の話聞いてきた人は、もうおわかりでしょう。なぜ必要なのか。命はひとりで守れないから。明確です。だから、自治や自治会は必要なんです。それは、人間はつながることで生きてきたという歴史が証明しています。例えば、人とチンパンジーの子育ての違い。チンパンジーは、実は5年に1回しか子どもを産めないんです。しかも、子育てをしている間は妊娠しない体のつくりになっているんです。でも、人間は毎年でも子どもを産むことが理論的には可能です。年子って言葉もありますよね。なぜ、

自治会の機能と役割

- 自治会加入のメリット
 - 加入することで、個人に対して直接的に何か得をするといった意味でのメリットではない。
 - 地域に根差して生活し、**自らの地域を住みよい地域にする**という意味において大きなメリットがある。
- 自治会活動を円滑にかつ継続的に進めていくために大切なこと
 - 1 地域の人たちがお互いに話し合うこと。
 - 2 交流していくことができる場を設けること。
 - 3 民主的な会の運営を心がけていくこと。

■公民とはなにをさすか？

公民館の生みの親・寺中作雄の解釈



公民館という「公民」とは、単に選挙資格を持っている人とか、市町村に住んでいる住民という意味ではない。

自己と社会との関係についての正しい自覚を持ち、自己の人間としての価値を重んずるとともに、一身の利害を超越して、相互の助け合いによって公共社会の完成のために尽くすような人格を持った人、またはそのような人格たらんことを求めて努力する人の意味である。

仕事＝稼ぎ＋務め

同じ霊長類であるチンパンジーは子育てをしている5年間の期間中は子どもを産めなくて、人は毎年産めるのか。その答えは、霊長類研究をしている京都大学の最新の論文の成果にあります。研究者が昔の暮らしをしている集落に入って行って実際にそこで暮らしてみたいんです。そこで、人は集団で子育てをしていたという事実を掴むんです。乳飲み子を抱えた母親が集団のなかで、子どもを預けて焚き木を拾いに行ったり、森に入ってイモを掘ってきたりする。つまり、人はもともとつながらないと生きていけない生き物だったということがはっきりとわかったんです。そこが、チンパンジーとの違いです。そして、先ほどの小栗旬さんと山田優さんのご夫婦。今は日本に住んでないらしいですけど、かつて自治会に入らない、入る必要があるのか、加入は任意だからメリットはどこにあるのかという週刊誌の記事がありました。私は、これは週刊誌を書いた記者が勘違いしていると思ったんです。メリットというのは、個人のメリットと勘違いしているなど。考えてみてください。どこの世界に、町内会に入ったら10万円キックバックされることなんてあるんですか。ないでしょ？ 町内会に入るメリットは、例えば、皆さんがたがお住まいの地域に防犯灯がありますよね。通学路とか通勤路に。あの防犯灯がチカチカしたり切れてしまったりしたら、誰が面倒を見ているんですか。役所の人にはチェックしていないですよ。町内会がチェックしているんです。僕は2年ほど前、町内会の役員をやっていたからわかります。ほかにも、福島のごみステーションの役員をやっていたときに、みんなでゴミを集めて回った後、役割分担をして掃いたりしました。皆さんのお住まいの地域で、防犯灯が切れて真っ暗な

道を子どもたちに歩かせたいと思いますか？ 家族に歩かせたいと思いますか？ 自分が歩きたいと思いますか？ ゴミがあちこちに散乱しているまちに住みたいですか？ 嫌ですよ。つまり、町内会は、自分たちのまちを安心して安全なものにするためにわれわれが生み出した仕組みなんです。メリットというのは、個人のメリットとは違って、自分たちの地域を安心して安全なものにするという意味においてのメリットなんです。地域に根ざして生活し、自らの地域を住みよいまちにするという意味において大きなメリットがあるということなんです。この町内会は日本独自の仕組みで、公民館も同じです。

では、社会教育、公民館を考えてみます。公民とは一体何を指すのか。公民館の生みの親の寺中作雄は、ちょっと難しい言いかたになりますが、こう言っています。「公民館の『公民』とは市町村に住んでいる住民という意味ではない。自己と社会との関係について、正しい自覚を持ち、自己の人権としての価値を重んずるとともに、一身の利害を超越して、相互の助け合いによって、公共社会の完成のために尽くすような人格を持った人、またはそのような人格のたらんことを求めて努力する人の意味である」。つまり、もっとわかりやすくいうと、「仕事」という言葉がありますよね。仕事には、ふたつの種類があります。ひとつは、稼ぎ。だって稼がないと、ご飯が食べられないから。だから稼ぐのは経済行為として大事。でも稼ぎだけでは大人の仕事とはいえない。もうひとつ大事なことは「務め」です。例えば、長野にも残っているところがあると思いますが、福島だと「普請」という制度が残っています。「道普請」とか「田普請」とか。「普請」というのは「直す」という意味ですよ。その地域の道路が壊れてしまったら、材料だけを持ち寄って、地域の人たちが総出で道を直す、それを「道普請」といいます。「田普請」というのは、田んぼが非常に手間がかかるので、地域の人が集まって田の畦を直す、それを「田普請」といいます。福島県では、中山間地域の奥会津の三島町ではまだ「田普請」が残っています。まさに責務である「務め」と「稼ぎ」。先ほど説明した「道普請」は公共の仕事でしょ。つまり、もともとわれわれ市民は公共を担っていたんです。ところが、どんどんサービスが専門分化していったら、今は目の前の道路が壊れても、役所に電話するだけでしょ。「壊れているんですけど、いつ直りますか」と。それを、もう1回取り戻していこうよ、という場が公民館だったわけです。

なぜ公民館が生まれたのか。もともと生まれたのは、昭和21(1946)年7月です。文部次官通牒というのが出て、そう聞くと、おわかりでしょう。その1年前は昭和20(1945)年8月15日、日本終戦です。戦後の焼け野原のなかで、何もなくなってしまった日本のなかで、どこから復興すればいいのか。公民館は、まさに戦後復興の拠点として生まれたんです。資源も何もない日本で立ち上がるには、人を育てていくしかない。その呼びかけに、文部次官通牒が出てわずか3カ月後に応えたのが長野県の妻籠公民館です。日本で最初に公民館ができたのは、この長野県なんです。まさに戦後復興の拠点として、妻籠に生まれたそのときに、寺中が『公民館の建設』という文章を残しているんです。本当にこれは歴史的な文章だと思っていますけれども。なぜ公民館をつくる必要があるか。「この有様を荒涼というのであろうか。この心境を索漠というのであろうか」。当時、寺中は文部官僚で、わずか35歳。公民教育課長、社会教育課長だったんです。そんな官僚の文章と思えないでしょ。「目に映る状景は赤黒く焼けただけた一面の焦土、胸を吹き過ぎる思いは風の如くはかない一聯(いちれん)の回想。焼きトタン小屋の向こうに白雲の峰が湧き、崩れ壁のくぼみに夏草の花が戦いでいる。これが3千年の伝統に輝く日本の国土の姿であらうか。あくせくと一身の利に趨(はし)り、狂うが如く一碗(わん)の食を求めてうごめく人々の群れ。これが、天孫の末裔(まつえい)を誇った嘗(かつ)ての日本人の姿であらうか。」

こういう書き出しの文章ですよ。そして、最後のところですよ。

「お互いの教養を励み、文化を進め、心のオアシスとなってわれわれを育む適当な場所と施設が欲しい。郷土の交友和楽を培う文化センターとしての施設を心から求めている。みんなが気を合せて働いたり、楽しんだりする為の溜り場が必要だ。そんな施設が各自の生活の本拠である郷土、われわれの愛する町村に一つ迄出来たら何と素晴らしい事であらう。併(しか)し乍(なが)ら、われわれはうっかり依頼心を起こした為に飛んだひどい目を見たではないか。今日のこんな惨めな環境になったのも畢竟(ひっきょう)、われわれが何事でも偉い人に任せ切り、お上に依存し切って、うかうかと戦争に巻き込まれて了(しま)った結果である。二度とあの苦しい経験をなめる様な事はすまい。われわれはもう凝り凝りしている。われわれが是非やらねばならぬ仕事、



われわれがわれわれのためにどうしても必要な施設ならばわれわれ自身の力で、それを作り上げよう。民主主義とは国民が進んで自分の為、すべき仕事をやり遂げることを言うのだ。われわれの力でわれわれの教養施設を作ろうではないか。」

これが寺中作雄の『公民館の建設』です。後で全文読んでほしい。この言葉に答えるようにして、3カ月後に妻籠で公民館が生まれたんです。すごくないですか。皆さんがたの先輩たちは、そういうことをやってこられた。当時のかたがたは、きっとこれを読み合わせたんだと思います。『公民館図説』という本では公民館をイラスト付きで説明しているんですが、いろいろを囲んで人々がいるイラストには「公民館は村の茶の間です」と書かれている。さらに別のイラストには「公民館は民主主義の訓練所です」と。もうわかったでしょう。僕がさっき言った「交流と自治」というのは、もともと社会教育の視点なんです。つまり、私の避難所運営とは、社会教育の視点・手法で避難所運営をしてきたということです。「交流と自治公民館は村の茶の間だ」。まさに交流の場でしょ。「公民館は民主主義の訓練所」とは、まさに自治活動の促進でしょ。これはもともと持っていた視点なわけですよ。寺中構想は時代遅れかということ、そんなことはないんです。

「生きがい」を大事にし、 「死にがい」のあるまちをつくる

エピローグに行きます。今日、競争社会、あるいは格差社会が広がっていくなかで、誰もが「勝ち組」とか「負け組」という言葉を聞いたことがあるでしょう？ これはおかしくないかと私は思いますよ。セレブリ



日本の小さな村々に
人たちが
小さな小さな
よろこびを追っかけて生きている
ああ 美しい
夕暮れの家々の窓の明かりのようだ

椋 鳩十

ティーな暮らしをしていれば勝ち組なんですか？ 年収がうん円以下だから負け組とか、またプレカリアート、パートタイマーとかフリーターは負け組で、あるいは適齢期を過ぎても独身とか、離婚後の独身組を負け組と言ったりもする。おかしいと思わないですか。だって、人の人生を何だと思っているんだよ。人の人生を勝ち負けで表現しているんじゃないよ、と思うわけです。そんな言葉が流行する社会そのものを私はとんでもないと思っているし、僕は親父ですから言いますが、自分の価値は自分で決めるんです。当たり前だと思いませんか。勝ち組とか負け組なんかじゃない。つまり、人は誰もが幸せになるために生まれてきたということなんだと思うわけです。

私たち自身が問われていることは何か。それは、この地域でどう生きるかということです。つまりは、ふたつの言葉で説明できる。「生きがい」と「死にがい」という言葉です。簡単に言いますと「生きがい」というのは、生きる目的、生きる目当て。これは個人の目標ですよ。例えば、海外旅行が好き、船に乗るのが好き、キャンプが好き、アウトドアが好き、それが生きがいです。でもその一方で「死にがい」という言葉がある。それは、まちづくりの運動のなかから生まれてきた言葉です。このまちで生まれてこのまちで育って、あるいはこのまちに嫁いできて、このまちで

仕事をして、私はこのまちに骨をうずめていきたい。ほかのまちで死ぬのは嫌だ。このまちで、この地域で私は死んでいきたいんだ。そういえるようなまちをつくって、次の世代にバトンタッチをしていく。生きがいはひとりでできますが、死にがいはひとりでは無理なんです。今、隣にいる人、あるいは今思い浮かべた人、その人たちと片方の手でしっかりと手をつないでいただいて、開いたもう片方の手で本当に大事に愛おしく生きがいを抱きしめていただく。生きがいを大事にして、そして死にがいのあるまちをつくってほしいと思っています。

わたしたちが目指す地域の姿。ひとつの言葉を読みます。

「日本の小さな村々に人たちが小さな小さなよろこびを追っかけて生きている。ああ 美しい。夕暮れの家々の窓の明かりのようだ。」

これは、喬木村のご出身の椋鳩十さんが亡くなったときの時世の詩なんだそうです。僕はすごく共感するんです。これがわたしたちが目指す地域の姿なんじゃないか。

今日、皆さんがたと一緒に考える時間を持つたのは、本当に僕の喜びとすることです。これで僕の話の終わりにしたいと思います。本当にありがとうございました。

アイデアコンテスト

動画上映

信州共生みらいアイデアコンテスト 実践ステップ編

～福祉のイノベーション「ふくし×若者×企業団体」～

報告映像の公開

長野県社会福祉協議会ホームページ内公開中

<https://onl.la/5qucNes>



1 池田工業高等学校

池工版デュアルシステム
グランメゾン池工ワンチームカート



2 長野工業高等学校

ポヨヨグラム



3 長野工業高等専門学校

藤澤研究室



4 長野工業高等専門学校

GEAR5.0「支援技術(AT)に関する
機器の開発ワークショップ」



5 上田千曲高等学校

VR4Girls & Men



6 上田千曲高等学校

OHG ～おしごとひろめ Girls～



7 駒ヶ根工業高等学校

福祉だより信州 No.787 (8月号) 特集



ふくしとイノベーション

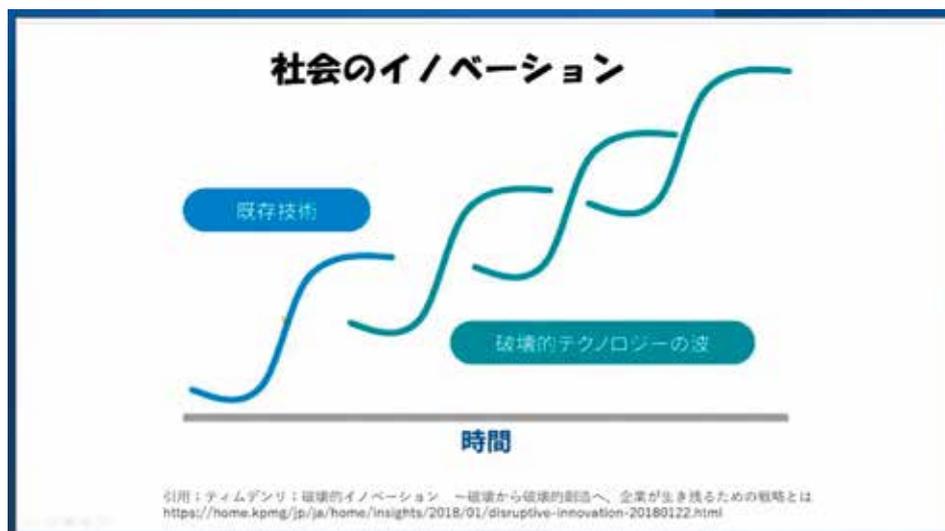


村松浩幸さん

(信州大学教育学部 技術教育グループ附属
次世代型学び研究開発センター長)

「イノベーション」とはどんな意味があるのでしょうか。
直訳すれば変革と言います。これまでの私たちの社会は、
たくさんのイノベーションによって発展してきました。
ではここで、社会のイノベーションということを見ていきましょう。

【図1】



大きな変化や変革が起きる時は、自然におこるのではなく、(図のように) いきなり大きな波のように大きな変革がおきる例があります。これは経済学的には「破壊的イノベーション」と呼ばれています。

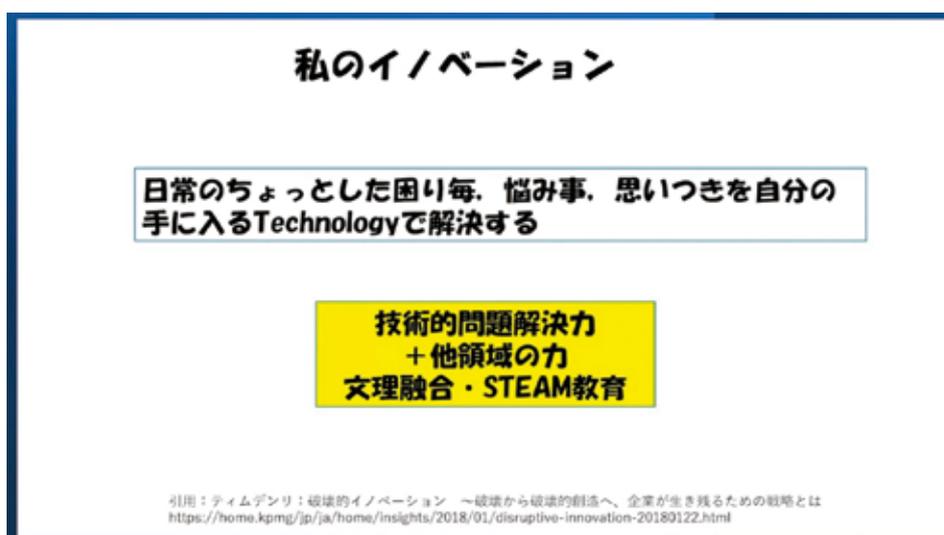
「破壊的イノベーション」は、今まで気づかなかった事、ちょっとしたもの、それほどたいしたものと思っていなかったモノが、気づいたら世の中の現実をとっても変える事があります。

その最たるモノが、コンピューターです。皆さんが今使っているパソコンやノートパソコンです。昔は、

大きなコンピューターが当たり前で、パソコンは遊び道具や趣味の延長という扱いでした。しかしそれが、あっという間に世の中を変えることになります。今では、スマートフォンやタブレットなど次々と開発されています。

まだ芽が出たばかりのモノや、気づかれていないモノが、その先々を大きく変えるかもしれません。今回のエントリーチームの皆さんが取り組んだ課題が、もしかしたら次の社会を変えていく「破壊的なイノベーション」を起こす可能性を秘めているものと思います。

[図2]



大きな「破壊的イノベーション」の前に、まず大事なことは「私のイノベーション」です。私のイノベーションとは、日常のちょっとした困りごとや悩みごとや思いつきを、自分の中にあるテクノロジーで解決することです。

課題解決に取り組む中で必要になってくるのは、技術的な問題解決能力が中心となってきます。しかし、それだけではありません。今回（信州共生みらいアイデアコンテスト）であれば、福祉のことや災害のことなど、技術的なことだけではなく、様々な視点で物事を考えなければ課題解決にはたどりつけなかったのではないのでしょうか。

これを世の中の的には、文理融合といいます。文系理系という区別を融合していこうという動きがあります。あるいは、STEAM（スティーム）と呼ばれ、S:サイエ

ンス・T:テクノロジー・E:エンジニアリング・M:マスマティクスに加えてA:アートといういろいろな領域を融合して解決をしていく。このように様々な分野を横断、融合しながら課題解決に取り組んでいく、こんな時代になってきました。

ここで、分野を横断、融合しながら課題解決に取り組んでいく事例を紹介しましょう。私は、高専ロボコンの審査員を何年か務めています。今年も国技館で行われました。今年、「超絶機巧」どれだけすごい技を出すかということがテーマとなっています。これは大変むずかしいですね。これまでのように競技が決まっているのではなく、自分達で「すごい技」とは何かを定義して考えることがありました。この点においては面白くもあり、難しくもありました。

[図3]



[図4]



コンテストでは、流鏝馬をするロボットやドミノを田植えのように並べていくロボットなどがあり、ワクワクするような面白さのものもありました。

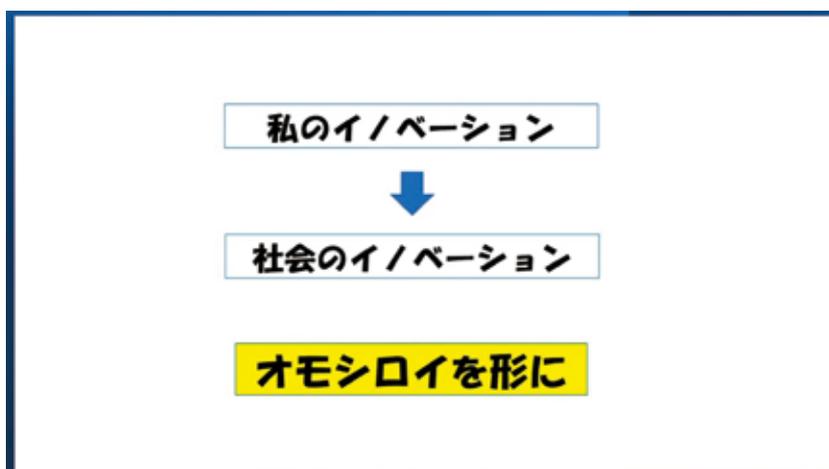
この大会のゲストに来ていたカズレーザーさんがいいことを言ってくれました。大会審査員のコメント「これって（超絶機巧をテーマとした今回のような大会）は、コロナではなくてもやってみたかったんです」ということに対して、カズレーザーさんは、「これは、課題を与えられるのではなく、自分で課題を作り出すことなんですね。」と話してくれました。

まさに、そうなのです。皆さんが今回報告してくれ

た取り組みも、自分たちなりに、自分たちが課題を立て、それに取り組んでいく。こういう力を持つことが、最も今求められている力ということになります。

これから目指す学びというのは、経産省が出している図に示されています。(図4)に示されている「未来の教室」が目指す学びというものです。「創る」とか「知る」というようなことを、ぐるぐる回していくことで学んでいくことを“学びのSTEAM化”といいます。いろんな領域のものを学びながら、自らが探究して、プロジェクト化として実践し、様々な分野と融合していくことが求められる学びです。

[図5]



皆さんが取り組んできたものそのもの自体がこれから目指す学びということになります。ぜひ自信をもって取り組んでほしいと思います。これから目指す学びとして、課題を与えられるのではなく、自ら課題を作る力を持っていること、皆さんがその一步を踏み出しているものです。

「私のイノベーション」そして、皆さんはこれから社会へのイノベーションに踏み出してきました。それを形

にしていくことで、さらに社会を動かす、破壊的なイノベーションへ繋がっていくことを期待しています。その原動力となるのは、「オモシロイ」を形にすること。オモシロイ事をしたいよね。そういう意欲や気持ちの高まりだと思います。

それらの気持ちを大切にしながら、ぜひ形に、それを社会に広げてもらえることを期待しています。

セッション一覧

セッション1-A

公民館とボランティアセンターの協働

～つなぐ・つながる おもしろさの発見～

セッション1-B

誰一人取り残されない地域づくり

～災害時に支え合える仕組みをみんなでつくる～

セッション2-A

地域活動・ボランティア活動を考える

～コロナ禍のピンチをチャンスに～

セッション2-B

子どもの居場所をつくる、支える

～お店、ボランティア、公民館…子どもを中心に広がるつながり～

セッション3-A

学びと出逢いからはじまる豊かな地域づくり

～社会教育、福祉教育でヒトがつながる地域がつながる～

セッション3-B

若者の自立を支える

～児童養護施設と地域がつながる・見守る仕組みをつくろう～

公民館とボランティアセンターの協働 ～つなぐ・つながる おもしろさの発見～

地域の拠点として機能している公民館やボランティアセンターには多くの相談が集まります。それぞれの拠点だけで受け止められるか、受け止めきれなければどうするか。ちょっと周りを巻き込めるかどうかでその後の展開は大きく変わります。

塩尻市ではシニアに関わる活動を行っている組織や団体の職員が3カ月に1回程度集まって情報交換会を行う会議がはじまりました。その結果、公民館と社協、市民の活動をサポートするいくつかの窓口の担当職員がつながり、いくつかの取り組みが生まれました。塩尻市の取り組みから、公民館とボランティアセンターのコーディネートの可能性や、協働することの魅力、ポイントなどをお伝えします。

【進行】沓掛 未奈さん（塩尻市社会福祉協議会 主事）



人づくり・つながりづくり・地域づくりに向けた公民館の取り組み

【出演者】安藤 寿秀さん（塩尻市中央公民館 主事）



長野県では、昔から公民館活動が盛んに行われてきました。私は塩尻市の職員として中央公民館の主事を4年務めています。総合文化センターという複合施設で、対象の地区を持たず、基本的には市民全員を対象としています。このほか、塩尻市には市の職員が主事を務めている塩尻10地区の下に公民館が10館と分館あります。公民館は各地区の支所も兼ねており、地区から選出された公民館長のほかに副館長と主事がいて、副館長はそれぞれの支所長も兼務しています。主事は実質の公民館関連業務の窓口を担っており、館長と相談しながら進めています。分館は各地域住民によって自主的に運営されています。

公民館では「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の3つの目標を柱に、「地域の憩いの場」「集団的な活動と交流の場」「地域を元気にする場」「文化を創造・交流する場」「学びの場」の5つの役割を常に念頭

に置いてさまざまな活動をしています。例えば中央公民館では「人づくり」として、地域への愛着と誇りを育てる次世代の担い手づくりの一環で、今年度から「しおじり数珠つなぎ」という活動をはじめました。これは、地域の方をゲストに招き、いろいろなお話を聞いて、数珠つなぎのように次回のゲストをご紹介していただくもので、2カ月に1回ほどのペースで開催しています。これまでに、元国立競技場長や、画家、漆芸家の方にお話をさせていただきました。第一線で活躍している人が塩尻市にいることを地域の皆さんに知ってもらうことで、そのなかで塩尻への愛着を強めていただければと思っています。

また、「つながりづくり」として、各回で設ける様々なテーマについて地域の皆さんが気楽に語る「ゆる活」という活動も今年からはじめました。例えば、市内在住の元松本山雅の選手と好きなサッカー選手について話したほか、オンラインで吉本興業の芸人に生出演していただいたり、市内のラーメン屋の店長を招いてラーメ



ン店の情報や家庭でのおいしい作り方を話したりしました。そういった中で、ゆるいつながりをつくっていただきたいとの思いで開催しています。

「地域づくり」としては、今年は「防災」をテーマに「しおじりキャンプめし」という取り組みを3回ほど実施しました。災害時でも作れるキャンプ飯を作る企画で

す。ピザ窯で火を起こしてピザを焼いたり、一斗缶をかぶせながら鶏の丸焼きを作ったりしました。防災は地域の方には参加しづらいテーマなので、気軽に楽しみながら災害時でも使える知識が得られるように取り組んでいます。

社会教育と福祉教育をコラボさせたボランティア資源の開発

【出演者】高砂 美織さん（塩尻市社会福祉協議会 主事）

続いて、塩尻市社協のボランティアセンターの協働についてお話します。ボランティアセンターでは4つの取り組みの柱を立てています。1本目の柱は、ボランティアの力を必要としている人とボランティアを通して地域のために活動したい人の「ボランティアコーディネート」です。踊りなどの特技を持ったボランティアと地域の公民館に集まる高齢者の介護予防を目的としたサロン等をつなぐようなコーディネート件数が多く、年間で100件以上、特技ボランティアが活動しているのが特徴です。

2本目の柱は、さらにボランティア活動が持続していくような「持続応援」です。活動の場所や資金の確保のほか、実施中の活動の継続や発展に寄り添うことも継続応援のひとつです。補助金の交付や、同じ分野で活動しているボランティア同士がつながるきっかけづくりをしています。

3本目の柱は「ボランティア資源の新たな開発」です。地域の担い手の養成のほか、地域で何かやってみたいことがある人と出会って思いをかたちにしています。令和3年度はコロナ禍で個人ボランティアの登録数は減っていますが、若い世代にボランティアセンターを通じて自分のやりたいことを地域で実現させるきっかけをつくってもらえたらと思い、今年10月から「ボラセンLINE」をはじめました。

4本目は「災害ボランティアセンターの機能」です。平常時は災害ボランティアの普及や災害について考えるきっかけを地域の中でつくり、緊急時は災害ボランティアセンターとして地域の復興にあたります。

全てに共通するのは、受け止める、寄り添う、つながる、またそのつながりを広げることです。そこにボランティアコーディネーターの醍醐味があります。

その中で、今日の「公民館の協働」というテーマ

に一番関わってくるのが、3本目の「ボランティア資源の新たな開発」です。社協で開講しているさまざまなボランティアに関わる養成講座には、すでに福祉に関心がある多くの方が足を運んでくださっていますが、まだ福祉とつながっていないものの地域貢献をしたいと思っている人が、実は地域課題の解決につながることもあります。その基礎となる福祉教育を地区でどう広げるか。それが公民館との協働です。先ほど安藤さんのお話にもありましたが、公民館が目指していることと私たち社協が福祉教育を通して目指している地域づくりは本当に共通するものです。公民館で取り組んでいる学習テーマの中で、実は社協や地域の中ですでに取り組んでいるものがあります。だったら、一緒にやれることはあったらいいというのが、公民館の取り組みを知るうえでの気づきでした。その結果、すでに社会教育と福祉教育をコラボさせた取り組みがはじまっているものもありますし、これからどんどん連携していく流れにきています。社協は福祉教育の視点から地域課題をみんなで考えて地域に入っていくことが得意ですし、公民館は、地域のワクワクする視点や楽しみ、自発的な思いから、地域の中で社会教育をつくっていくところが魅力です。社協としては、その協働に大いに乗っかって、地域づくりをしていきたいと思っています。



シニア事業の関係者が集まってつながる気軽な情報交換会

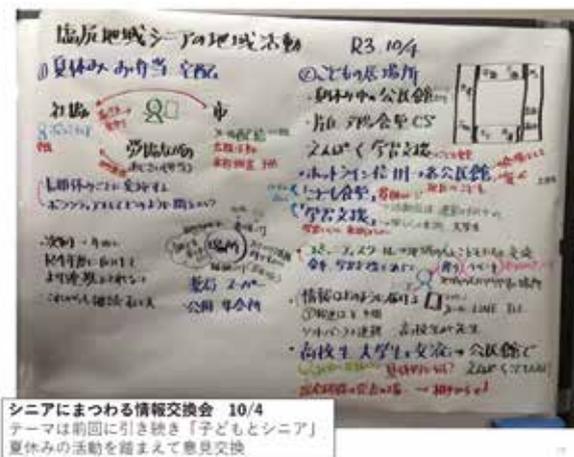
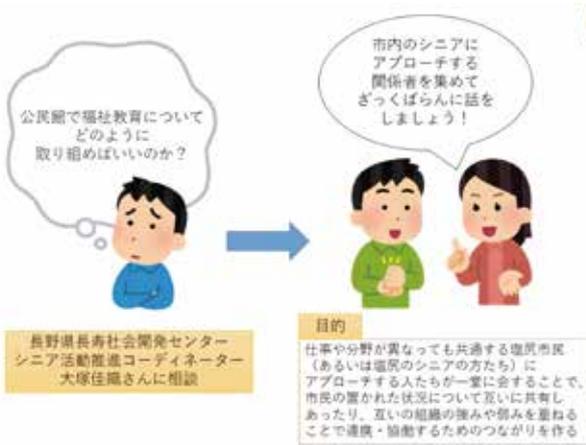
【出演者】安藤 寿秀さん（塩尻市中央公民館 主事）

では、このセッションの本題として、実際に公民館と社協が協働した事例を通して見えてきた取り組みや可能性について考えていきます。

私はこれまで、地区の公民館主事も含め、8年間公民館に携わってきた中で、福祉教育に取り組んだことがありませんでした。しかし、これからの地域の中で福祉は非常に重要なテーマであり、どうしても中央公民館の中で福祉教育に取り組んでいきたいと悩んでいました。そこで、今年度のはじめ、これまで研修などに一緒に参加し、中央公民館運営審議会の委員会でアドバイスもいただいていた長野県長寿社会開発センターのシニア活動推進コーディネーター・大塚佳織さんに相談をすると、市内のシニアにアプローチする関係者を集めてざっくばらんに話をしたらどうかとのアドバイスをいただきました。

そこで、様々なシニアの組織の方に集まっていただく気軽な情報交換会を4月に初開催しました。公民館として私が参加し、社協からは、大塚さん、香掛さん、高砂さんに出いただき、ほかに塩尻市の地域づくり課、長寿課、市民交流センター、ロマン大学の担当職

員のほか、地域の区長さんや市内の老人クラブ、市民活動団体の方々などに集まっていただきました。また、オブザーバーとして、長野県生涯学習推進センター所長の本下巨一さんからも意見をいただきました。その中で、社協や審議会の取り組みなど、初めて知ったことがたくさんありました。そこで、全3回を通じて、それぞれの活動や思い、目的を話して共有を図りました。その後、「子どもとシニア」というテーマで、コミュニティスクールの担当課である教育総務課と、子どもの貧困対策に取り組むこども支援課の職員にも参加してもらい、より話が広がっていきました。さらに市役所から新しいメンバーも加わり、これまでに4回開催しましたが、大前提として、それぞれに抱えている業務や課題を知れたのがよかったと思っています。また、顔が見えない関係での連携は難しいので、お互いに顔見知りになれたことも意義があり、自分の不得意分野を補い合える関係づくりにもなりました。実際に、塩尻市宗賀地区の宗賀公民館と社協が連携し、地域包括ケアシステムの推進のために、地域住民の自働力の向上とつながりを考えるきっかけをつくるために、



宗賀地区で避難場所に指定されている「ふれあいセンター洗馬」で災害時でもできる料理教室を実施しています。

こうした成果から、来年も、この情報交換会を開催していく予定です。現在計画しているのは、中央公民館の主催で行う塩尻版「地域づくりの支え手入門講座」です。公民館、自治体、社協の地域づくりの支え手を集め、まちづくりや市民活動を現地視察し、支え

手の地域活動への支援やつながりを広げていく取り組みで、情報交換会のメンバーにもお手伝いいただいで全6回ほど行う予定です。

他市では、こうした情報交換会をやりたくてもなかなかうまくいかないこともあるようです。しかし、やりたいことを根気よく気軽に気楽に関係ある職員に話していけば、同じような思いを持った方はつながっていくように思います。

それぞれの専門職の役割の強みを生かすことで広がる活動の幅

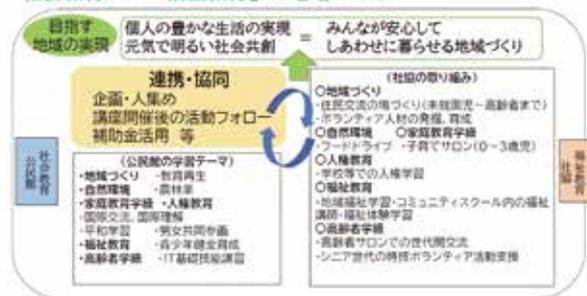
【出演者】高砂 美織さん（塩尻市社会福祉協議会 主事）

社協としては、今年度はコロナ禍で継続が難しくなった子どもの居場所づくりやこども食堂の開催を相談する地域の声がボランティアセンターに多く集まってくる中で、なかなか道筋が立てにくかったのが実状でした。その中で、シニアにまつわる情報交換会で子どもを専門とした市の家庭支援課とつながり、地域のお弁当屋による子どもの宅食事業をかたちにすることができました。特に大きかったのが、家庭支援課が持っているひとり親家庭へのメーリングリストを社協も活用させていただけたことです。ほかに、誰でも集える場づくりの「お気楽カフェ」や、ロスパン活用事業「きのうのパン屋さん」など、公民館や子育て支援センター、行政のそれぞれの専門分野が一緒に考えたことで活動につながったケースもありました。

協働前後での変化は、公民館など他分野の専門職とつながることでそれぞれの役割の強みが見え、それを生かすことで社協の活動も広がったことです。社協職員内でも福祉教育と社会教育の接点を改めて職員間で共有することがなかった中で、公民館と社協の共

通点が見える化し、福祉教育の担当者同士で情報を共有したことが、協働や連携につながったと思っています。また、私自身が社協歴が長くない中で、様々な分野とつながるほど各専門分野のスーパーバイザーが増えていき、ありがたさを感じました。今後も公民館や他機関とつながることで、まだ見ぬ地域づくりの担い手に出会う機会が増え、そこから新たな地域づくりの視点が生まれてくると感じています。そこで、社協として連携することをためらわず、福祉教育を進めていきたいと思っています。

「社会教育 × 福祉教育」の地域づくり



誰一人取り残されない地域づくり ～災害時に支え合える仕組みをみんなで作る～

災害が多発化するとともに地域の高齢化が進む中で、災害時に助け合う仕組みを、住民や消防団や福祉専門職など、みんなで作ることが重要になっています。そこで、阪神・淡路大震災での被災体験をきっかけに災害支援に関わる石井布紀子さんとともに、県内各地で取り組まれてきた災害時住民支え合いマップづくりや、デジタルマップを活用した防災福祉カンタンマップ実証実験を題材にしながら、地域で取り組む防災・減災を学びます。

【進行】石井 布紀子さん（NPO 法人さくらネット 代表理事）



長野市柳原地区の避難計画作成に向けた多角的な取り組み

【出演者】新井 栄子さん（柳原地区住民自治協議会 事務局長）

長野市柳原地区住民自治協議会で事務局長をしています。柳原地区は長野市の東北部、東の玄関口で、須坂市と千曲川でつながっています。人口は7000人弱で、災害時要配慮者名簿に手を挙げている人が500人強。その地域づくりの中で、防災や減災に関して「災害にだって負けない人とまち」を掲げて活動を始めています。ただ、行政から住民名簿が提供されて、避難計画の作成が推進されてからの約10年間、なかなか計画が進まなかった中、2019年、台風19号の被害で千曲川が越水し、隣の長沼地区での決壊を目の当たりにしました。柳原地区としても、普段は二つの排水機場から千曲川へ水をポンプアップして排出していますが、台風19号ではそれがうまく機能せず、田畑の冠水を久しぶりに経験しました。大きな河川の氾濫や洪水だけでなく、通常河川の内水氾濫という問題も抱え、住民や役員等も今のままではいけないという気持ちがより大きくなってきたところです。



しかし、内水氾濫の被害もある中で、柳原地区には災害時に公に指定された避難場所がありません。それぞれが判断して最良と思われる避難を考えなければいけな

い状況です。そうした中で台風19号で災害支援に来た石井さんと出会ったことから、翌年の2020年7月・8月・9月に石井さんに柳原地区に来ていただいて、災害について、避難行動要支援者が地域にどう広がっているかを地図上にドットで表す研修を地区の役員たちで受け、10月には避難の方法や地域資源について話し合いを重ねてマップを作りました。現在は、それをデジタルマップにしています。ハザードマップの上に災害時要配慮者を掲載しており、ハザードを外すと5つの自治区の境界線が浮かび上がって、重度の要援護者と、中低度やなんとか福祉避難所に行ける方、一人暮らしの高齢者、障害の認定はあっても比較的自立した生活ができていの方を色分けしました。デジタルマップなので、その都度情報を変えられ、最新の情報がいつでもプリントできることがひとつの魅力です。

マップ作成時には、浸水時に高い建物に逃げる場合、地域にあったスーパーマーケットが閉店になって屋上が使えなくなってしまったため、パチンコ屋の立体駐車場を使う意見が出ました。その後、台風で実際に住民が避難しているのを見たパチンコ屋の経営者が、地域に貢献したいと災害時の避難場所として申し出てくれたことで協定を結び、パチンコ屋の支店がある市内3地区も同様に協定を結んでいます。立体駐車場だけでなく平面の駐車場も使えるため、地震などでも対応できると思っています。

このように、災害時住民支え合いマップの作成は、

研修を重ねながら、地域としていろいろなことを考えなければいけません。その上で、危険が迫ったときにどのように住民にお知らせすればいいのか。それが今、地区の最大の課題です。

そもそも、なぜ避難計画が10年もできないのか。住民名簿があっても、避難時に支援を必要しているのかはご本人にお聞きするしかなく、その支援方法も具体的に示されることがないので、地域としてはどのように避難計画の作成に取り組んでいいのかがわかりませんでした。また、地域の中でなかなか当事者意識が育たないのも問題でした。さらに、地域は今までも助け合って暮らしてきましたが、個人情報に掲載された名簿は慎重な取り扱いが指示される中、提供を受けた区長さん方は封筒に入れて紐で結び、鍵のかかった引き出しに入れておくくらい厳重な管理しており、中を確認して一人ひとりの住民について考えることすらされない状況になってしまっていました。そうになると、本来は隣同士でなんとなくわかっていたことも、名簿になった時点で口にすらできないとみんなが思い始めてしまうので、なかなか計画の作成が進んでいきませんでした。最近では、名簿の情報も大事ですが、やはり隣近所で話し合う中でそれぞれの事情や暮らしを理解し合い、一番良い避難の仕方について同じテーブルで考えていく手法をとっていれば、もう少し計画が進んでいたのではないかと特に感じています。地域の役員が話しているだけでは、計画は全く進みません。とにかくみんなで集まっていろいろと話し合う生活の場が大事であると思っています。

その中で最近考えているのが、大人も子どももみんな

なが集まってワイワイ楽しくできる活動です。役員間では現在、実際にパチンコ屋の屋上にどのように避難できるか、お試しツアーのようなかたちでみんなで楽しく避難場所に行ってみるといった意見が出ています。また、河川の話や地域の歴史なども含め、自分たちの地域をみんなで知る活動も考えています。特に、災害時要配慮者や高齢者、子育て中の方など、いわゆる弱者と呼ばれる方々にも気軽に集まっていただき、様々なことが話し合える場をつくりたいと思っています。結果的に、災害時の避難指示のタイミングでスイッチを押せる人をつくる、あるいは探す、増やしていくこと、スイッチが押されたらすぐに行動できる地域住民を育むことが大切です。誰かがやってくれるのではなく、自ら動く地域住民になるために、できる活動を始めることが、今私たちにできることだと考えて活動をしています。

また、今年、柳原地区では地震を想定して全ての区で安否確認をし、地区で情報を共有する訓練もしました。組長を中心に全戸を訪ねて避難行動要支援者を確認し、その情報を区の役員が名簿と照らし合わせてアプリのシステム上に入力し、どう支援するかをシミュレーションする訓練です。しかし、やはり世帯主名しかわからないと、役員が要支援者名簿の方を確認するのに苦労しました。ただ、大変ながらも、各地区の現状を地域として把握することはできることはわかりました。マップは実証実験を重ねている段階ですが、完成途中であっても平時の避難訓練に使うなど、有効活用ができています。

豊丘村ならではの社協と行政が連携した災害時住民支え合いマップの作成

【出演者】宮下 一代さん（豊丘村社会福祉協議会）

災害時住民支え合いマップについて、豊丘村の取り組みをお話します。豊丘村は長野県の南信、中央アルプスと南アルプスに挟まれた天竜川の東側に位置している、日本一美しいといわれる河岸段丘がある村です。人口は約6700人、災害時要配慮者数は714人です。

3年ほど前、豊丘村社協で災害ボランティアセンターの立ち上げ訓練を行った際、県社協の橋本さんと福澤さんが来てくださり、災害時住民支え合いマップについてお話していただきました。社協としては、こ

れを機に災害時住民支え合いマップを作成したいと役場に何度か相談に行きましたが、その思いは届かず、理解を得ることは難しく、マップ作成には至りませんでした。令和2年度、県のマップ担当者と橋本さんが支え合いマップについて説明に来てくれ、役場の福祉係と防災担当の総務係、そして社協の地域福祉課でお話を伺いました。福祉係長はこのときの県社協の資料がとてもわかりやすく、それに従えば豊丘村でも災害時住民支え合いマップができるというビジョンが見えたと言っています。豊丘村の住民性からいく



と、トップダウン方式で区長から順に住民に下ろしていつて作成し、また、今まで9月の防災の日に合わせて住民が自治会長に提出していた避難行動要支援者等確認表

をマップの調査票兼同意書に変更しても抵抗なく住民が記入してくれるというのが福祉係長が見えたビジョンです。また、マップ作成は難しいと思い込んでいた総務係長も、完成形を目指すわけではないという橋本さんの言葉でやってみようと思えたそうです。こうしてやっと役場の理解が得られ、行政と社協が連携して、豊丘村の災害時住民支え合いマップの作成に向けて動き始めました。

まず、雨が多く災害が増える6月から7月までには作ろうとゴールを決め、福祉係長が次年度の更新も含む令和4年度までの計画を立ててくれました。区長会でも特に異論はありませんでした。次に自治会長会にお邪魔してマップを説明し、各自治会へマップの支援を行う流れで作業を進めました。説明資料は他市町村社協のものを参考に何回も検討を重ね、豊丘村バージョンにアレンジし、住民にわかりやすいように福祉係長が作成してくれました。

マップ作成は自治会単位で行いましたが、豊丘村では隣組単位で区費を集める常会が月に一度あるため、そこにマップ作成日を設定してもらうことが多かったようです。なるべくマップ作成のためだけに集まることのないように地域の負担を減らし、マップの調査票は、自治会長の手間を省くために役場の隣組文書配布日に合わせて隣組長にお届けしました。

最初に取り組んだ地区は役場も社協も大勢で参加させていただき、県社協の橋本さんにも来ていただきました。非常にまとまりのある小さな区で、区長は自分たちの知っている情報をマップに落とせばいいだけだと早い理解でした。ほかの地区でも、地域の予定に合わせて、休日・祝日・夜間でも必ず行政と社協とセットで出かけ、多いときは1日に4つの自治体で重なってしまうこともありましたが、手分けしたり、時間差で対応したりしました。このとき学んだことは、住民主体の作成でなければいけないということです。各家の情報を住民が話して確認しながら共有することに意味があります。その後は役場の広報紙や社協報でマップ

の必要性や意味をお知らせし、マップ作成時に住民から出てきた質問などをQ & A方式でまとめた番組を、役場の健康福祉課と社協が合同で作りました。

8月には、54自治会中51自治会がマップ作成済になりました。その中で、私たち社協は最初から最後まで、地域の普段の支え合いが大事だと伝えました。マップを作成することで地域に関心を持ってもらい、そこから顔の見える関係性を築くことが、いずれ災害に強い地域になると話してきました。防災という視点だけではなく、その先にある地域づくりをしていくという思いは、社協も行政も同じだったと思います。

こうしてマップ作成が進みましたが、やはり、行政と社協が普段から連携が取れていることが一番大きなポイントかと思えます。そして、役場がやる気になったタイミングを絶対に逃がさないということも大事なことです。また、当時の福祉係長が「自分が自治会長や隣組長の立場だったら」と住民性を考えて計画を立ててくれたことが、わかりやすい資料や地域の負担軽減につながっていると思います。さらに、今回は多くを求めず、とりあえずマップの作成という同じ目的に向かって行政と社協がぶれずに進んだことも大事でした。

各自治会長からは、地域住民の状態をマップに見える化したことでわかりやすくなった、マップを通して地域を知ることが大事だという声が聞かれました。また、役場と社協が丁寧に作成支援に携わったことも評価していただきました。私たちの気づきとしては、マップの必要性が高いという意識が住民にあることがわかり、マップ作りを通して住民も私たちも自治会の境界線がわかり、地域を知ることができました。若い移住者と昔から住んでいる高齢者が話ができる場にもなり、多世代交流のきっかけになっているということが、このマップ作りを通してわかりました。

今後は未作成の自治会に働きかけ、100%の作成率を目指していきますが、課題は役員が毎年変わる中



R3.8 51/54自治会のマップ作成完了

で、更新が必要なマップが地域に定着するまでどのように支援していくのかということです。マップが定着するまでは、まだまだ行政と社協で丁寧に支援をしていく必要があると思っています。また、マップ作成の調査票兼同意書の様式の見直しや、マップ作成に対する各自治会の意識の違い、防災訓練でのマップの活用、デジタル化に向けての検討も必要です。

最後に、豊丘村社協で始まったばかりのBCP（事業継続計画）の取り組みについても、少しお話しします。豊丘村社協は今年度、災害福祉カンタンマップの実証

実験に参画し、アプリに介護サービスの利用者情報や職員の情報などを入力して、自治会の境界線をカンタンマップを落とし込んでいます。昨年の11月には石井さんに来ていただき、BCPの職員研修を行いました。それを受け、12月に事業継続委員会が発足し、職員の初動マニュアルを見直しています。事業所としては、自然災害に対するBCPの作成を急いでおり、今後は石井さんと県社協の力を借りて作成を進めていきたいと思っています。

大切なのは、災害時住民支え合いマップを作るプロセス

【進行】石井 布紀子さん（NPO法人さくらネット 代表理事）

今日は災害時住民支え合いマップの可能性として、災害時に支える仕組みづくりを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。私は阪神・淡路大震災で被災してから、災害福祉、防災福祉に関わってきましたが、全国の多くの地区で福祉活動をしている中で、防災マップに福祉の視点を入れていたことで被災地の命を守れた、災害ボランティア活動が活発にできたという声をたくさん聞いてきました。その観点から、平時の二つの地域の取り組みを聞き、日頃の地域福祉活動は減災力だという確信を持って皆さんと一緒に考えていきました。

長野県では、災害時住民支え合いマップ作りはとてと進んでいますが、やはり地図作りが大変だったり、頭に入っていればいいという役員の方の意識があったり、個人情報保護という大きな壁があったり、そもそも関係性がなくて情報収集ができないという問題がある中で、行政や社協、地域の役員の方々の負担があります。それを負担と感じず、むしろチャンスだと捉えて取り組んでくださった話題を聞いていただきました。

共通していたのは、マップ作りが目的ではなく、マッ



プ作りはプロセスであるということです。地域の人たちがみんな地域のことを考え、地域を好きになる材料として地図を作っていくという点では、マップ作りは非常に意味



があると思っています。また、小中学生の意見を地図にうまく取り入れると非常によい地域づくりになるという事例が全国でも増えており、そこから、おじいちゃんおばあちゃんを守りたいとマップを愛する子どもたちが各地で多く生まれているので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

そうすると、あえてマップ上に関係性を出すことが究極の課題ですが、人と人がどうつながっているかという関係性はプライバシー情報になり、繊細な問題でもあります。一方で、冬季に凍結する場所や夜暗い場所という地域課題はワイワイと共有しやすく、何を共有資源として地図に載せるかを工夫するだけでも地域の人づくりや意識変革はできていると感じています。防災活動や福祉活動をマップというかたちで次の活動につなげていく可能性を感じていただけたらうれしく思います。

地域活動・ボランティア活動を考える ～コロナ禍のピンチをチャンスに～

新型コロナウイルス感染症拡大によって今までやってきた地域活動やボランティア活動が止まってしまったところもあります。その一方で、つながりを途切れさせたくない思いや新しく生まれた“困った”を解決するために工夫をして活動を続けているところもあります。

コロナ禍での活動や思い等を振り返りつつ、あらためて地域活動やボランティア活動の価値について考えます。

【聞き手・助言者】加山 弾さん（東洋大学教授）



コロナ禍で生活不安を抱える子育て世帯に食材を届ける活動

【出演者】地域で食材を循環させる会（松川町）

私たちは下伊那郡松川町で「食材を循環させる会」というフードドライブ^{いずはら}を行っているグループです。この会の代表の何原と事務局の宮下でお話をします。

会の設立のきっかけは、新型コロナの影響が長期化する中、松川町でも仕事などの生活基盤が不安定になる方々が多くいらっしゃったことです。一昨年6月に何かできることはないかと社協に相談したとき、新型コロナウイルスの生活福祉資金の貸付で社協にいらっしゃる方の中には高校生の子どもを抱えた方がいると聞いたことで心が動きました。そして、町内の子育て世帯に食材を届けたいという思いから、自宅に眠っている食材を届けるという、地域で食材を循環させる会を、地域住民と学習支援をやっているNPO法

人Hugというグループのメンバーで立ち上げました。

社協からも助言をいただき、チラシや広報でお知らせし、会員の口コミで活動を広めていく中で、地域にお米を渡している会社があるとわかったり、活動を耳にした町会議員が町内の製菓会社や介護商品を扱っている企業につないでくれたりと、少しずつ食材集めの情報が集まってきました。そして、発足の翌月の7月には、1回目の配布会の準備が整いました。

今も継続的に食材が集まっています。その配布会の前に会員で集まって袋詰めし、25世帯分、いつも用意しています。毎回20名程度の子育て世帯が受け取りに来てくれ、地元の松川高校ボランティア部の生徒が丁寧に対応してくれます。取りに来てくださる方にとって、子どもたちから渡されるほうが緊張感や抵抗がないのではないかと考え、その点はよかったと思っています。女性部の方が生理用品を届けてくださったこともあり、私たちだけでは思いが至らなかったことも皆さんの温かい気持ちのおかげでお届けできました。食材配布自体は月1回で、十分な量をお届けできているか心配ですが、「私たちのことを思ってくれる人がいてうれしい」「活動を知っていたけど決心がつかず、やっと来れた」という言葉をいただいています。

昨年6月には、松川町社協の広報で活動を知ったJA南信州から、ファミマフードドライブとの協働に声をかけてもらいました。ファミマフードドライブでは、月2回、食材を町内のファミリーマートの専用の回収



地元住民以外にも、企業や商店、団体女性部、ロータリークラブ…多くの方から食材が届きました。

ボックスに持ってきていただきます。それを回収し、ほかの食材と一緒に配布会で配るという流れです。ファミリーマートでは定期的に人の出入りがあるって食材を集められますが、その食材をお渡しする場がなく、私たちの会ではお配りするルートはあるけれど、食材集めが一番の課題でした。つながることでお互いの課題を補い合って、いいところを生かし合えるうれしい活動になりました。

また、社協に新型コロナウイルス感染症の影響での特例の貸付資金の相談に見えた方にも会の食材を分けています。

この活動を通じて、地域の中で有効に食材を循環させるだけでなく、皆さんの温かい気持ちや優しさも循環しているように感じます。また、新しいつながりの中で、地域のよさや可能性も実感しています。



食材の袋づめ

配布会の前には、集まった食材の袋づめを行います。

毎回「食材」「お菓子」「お米」をセットにし、25世帯分用意しています。ここに季節の野菜や果物が加わることもあります。

松川町ならではの 梨やりんごジュースも 🍏



コロナ禍だからこそ、地域の高齢者の集まる楽しみの拠点を

【出演者】中山 智代子さん（熊倉お茶の間サロン代表／信濃町）



熊倉お茶の間サロン

開催	平成13年から
会場	公会堂（熊倉生活改善センター）
開催頻度	年間7回程度（2月に1回程度）
参加者数	毎回10人前後
地域の状況	世帯数50戸程度（高齢化が進んでいる）
サロン内容	おしゃべりが中心（60～90分程度）

「^{くまぐら}熊倉お茶の間サロン」の中山智代子です。私の住んでいる信濃町は、長野県の最北端、人口が7500人ちょっとの小さな町です。熊倉地区は50戸たらずの準農村地帯で、65歳以上の高齢世帯や一人暮らしの

方が年々増えていて、過疎化が急激に進んでいるという現状です。

そんな中で「熊倉お茶の間サロン」という集まりに私が参加したのは、ちょうど1年前ですが、活動自体は20年以上続けているそうです。参加者は毎回10人くらいで、繁忙期、農繁期を避けたり、病院通いの方も多いため、曜日が被らないように調整しながら、なるべく大勢の人に出ていただけるように、年に6～7回を目処に開いています。

やっている内容は、とにかく集まってお茶を飲んでお喋りをして帰るとい、ただそれだけのことですが、各家庭の美味しい漬け物や煮物、手作りのスイーツなどを持ってきていただきながらお喋りを楽しみ、ときには社協に協力をしていただきながら、ボケ防止のための脳トレやゲームをしたり、簡単な体操で体を動か

してリフレッシュをして帰っています。

コロナ禍で、開催そのものを悩んだこともありましたが、私たちが出した結論は、対策をしっかりと取りながら、コロナには負けないで開催することでした。というのも、一人暮らしの方々の中には、この会を楽しみにしている方が何人もいらっしゃり、この1週間、誰とも会わなかったとか、会話しただのは何日ぶりという方もいらっしゃるからです。豪雪地帯で冬期は買い物に行くことさえもままならないような生活なので、やはり楽しみにしている方が一人でもいれば、大切にしていきたいというのが私たちの思いです。思い切り笑って帰ることが、みんなの心身の健康につながり、ひいては村の絆や元気の源になり、支え合いにもつな

がっているのではないかと考えています。

一方で、高齢化が進み、先細りになって続けていけるかなど、後ろ向きになることもあります。こんなときのこんな地域だからこそ、やはり集まるのが大事だと思って、細く長くつながっていければと、あまり気負わずやっています。こうして、次の世代の人たちにバトンタッチができていけばいいと思っています。



コロナ禍でも39年続いてきた音訳ボランティアを工夫して継続

【出演者】山口 和子さん（やまびこ会 会長／長野市）

長野市で、目の不自由な方たちへの朗読ボランティアをしている「やまびこ会」と申します。

私たちが生活していく上で、情報というのは、命というほどとても大切なものです。その情報を目の不自由な方は音にしないと何もわかりません。そこで、コロナ禍でボランティアも何かと制限されていますが、細々と工夫しながら、情報を止めないで活動を続けようと頑張っています。

目の不自由な方という「点字」と思われがちですが、点字はたった6つの点で47文字が編成され、スラスラ読むのは至難の技です。点字が読める人は、視覚障害者の1割弱ぐらいだと聞いています。そこで私たちは音にして情報をお伝えしていますが、まだまだ音訳ボランティアの存在はあまり知られておりませんので、少しお話をさせていただきます。

発足は、国際障害者年が宣言された昭和56年頃です。長野県下で初のボランティアコーディネーターとなった山田千代子さんが視覚障害者と接する中で、情報が少ないという声があり、長野盲学校に伺ってやはり自分たちの住んでいる地域の身近な情報、地域の話題がほしいという要望があり、地元の信濃毎日新聞を電話によるテレホンサービスで流そうと、社協名で朗読ボランティアの募集をし、集まったメンバーで昭和58年に「やまびこ会」が設立されました。新聞は毎日出ているので、365日音訳を流し続け、今年で39年目に入ります。利用者の皆さんからは「外に出たと

きの話題に助かる」「家族の会話の中に入れていける」「夜寝るときに楽しみに聞いている」などのうれしい言葉をたくさん聞き、励まされて頑張っていると思います。

会の活動も拡大し、今は地域の情報誌、依頼された図書、小説や雑誌、取扱説明書、会議の資料、新聞連載の新聞小説などを音声化し、貸し出しをしています。不自由さを知るために、目の不自由な方との交流も大切にしています。

うれしかったのは、交通事故で視力を失った46歳の男性が、毎年1回行っている野外交流会に参加してくださり、最後に「私たちのためにこんなに頑張ってくれている人たちがいることを、今日初めて知り、私は生きていてもいいんだと知りました」とおっしゃってくださったことです。本当にうれしく、今でもこの言葉は活動の支えとして温めています。

それから、勉強会も大事な取り組みのひとつです。しっかりした滑舌で、アクセントも正しく、内容が伝わってイメージが描ける読みをしなければなりません。毎月定期的に研修会を重ね、少しでも伝わるよう、耳に心地よい朗読に努めています。

今、朗読と音訳、2種類の表現をしましたが、朗読はどちらかというと泣いたり笑ったりしながら演技たっぷりに読むもので、鑑賞の醍醐味のあるものです。音訳は、視覚障害の方たちの目の代わりとなって、そこに書かれているものを読む活動です。演技などは

しませんが、棒読みでは伝わりません。やはり、声に表情は必要です。

全国にも音訳ボランティアがたくさんいますが、地域によって音訳活動に差があってはならないので、全国音訳ボランティアネットワークを結び、年に一度、全国から東京に集まって情報共有し、研修をしています。通常は各グループから1～2人の参加で行われていますが、コロナ禍では、長野にいなながら、オンラインで16人ほどで参加できました。

それと、コロナ禍でも読み手と校正編集者はUSBメモリーを使ってデータをやりとりし、密にならずに制作ができています。また、インターネット図書館もでき、録音図書制作が全国で重複して作られない仕組みになりました。



録音図書制作が全国で重複して作られない仕組みになりました。

平成28年には、障害者差別禁止法が制定されました。やっってもらっているから我慢という恩

恵的福祉ではなく、本音で意見が言える権利としての福祉に変わりました。また、音声訳をするだけのサービス型ボランティアから、視覚障害者たちの環境整備や社会環境を一緒に整えていくことを目的とするアクション型ボランティア活動も並行して進められました。その大きな成果が、EYEマークです。録音図書を作るには著作権問題がネックですが、EYEマークを著書につけていただくと、著作権の許諾なく作ることができます。その運動を音訳者や大学の先生たちと一緒にやって行った結果、勝ち取って、録音図書の利用範囲も大きく広がりました。

さらに、IT機器を使った合成音声による音訳活動も、目覚ましい発展をしています。肉声とそれぞれの利点を生かして、合成音声と共同で頑張ろうという方向に進んでいます。

コロナ禍で音訳活動も自粛を余儀なくされていますが、そんな中でも、全国の翻訳者は工夫して乗り越えています。私たちはできるときにできることをできる人が、という柔軟なかたちで、なんとか目の不自由な方に情報を送る活動を止めないで頑張ろうとしています。

まとめ 加山 弾さん

地域活動では、レジリエンスという言葉聞く機会があります。復元力・回復力という意味で、バネに例えられます。バネは押さえつけると跳ね返る力が働き、コロナ禍であれば、駄目だと抑えられた中で、反発力が湧きます。つまり、コロナ禍で人が集まることできなくても、手紙を書いたり、電話をかけたり、安否を気遣い合ったり、ICTを使って先進的なつながり方を導入してみたり、何とかつながる方法を考え、気をつけながら大いにつなごうという気持ちが今、花開いていると思います。

前回、レジリエンスという言葉が出たのは、東日本大震災のときでしょうか。何とかしようという強さが我々の中にあるという意味では、コロナが終わっても、良くも悪くも以前と全く同じ状態には戻らないと思いますが、しんどいときに一緒にやってきたことは後々、さらに以前よりも強く残ります。コロナがなければ協力し合わなかった関係性の広がりもレジリ

エンスですし、コロナ前からの課題だったIT化が進んだり、地元の企業や若者とつながることができたりというのは、何年もしてから重要性がわかるかもしれません。

そういう意味では、学問的には、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）の強い地域には、災害や犯罪、高齢者の徘徊などを未然に防ぐ力があり、挨拶もしない、声を掛け合わないというソーシャルキャピタルの低い地域は、犯罪者も多く、災害時には助ける力が弱いなど、見えないソーシャルキャピタル、人と人とのつながりは、あらゆるものを跳ね返す力になります。図らずもコロナ禍でダメージを受けた中で、それでもつながることができる取り組みのソーシャルキャピタルが、大きなレジリエンスではないかと思います。



子どもの居場所をつくる、支える ～お店、ボランティア、公民館… 子どもを中心に広がるつながり～

「おいしいごはんをたくさん食べてほしい」「みんなと楽しく遊んでほしい」「悩みがあれば相談に乗りたい」。子どもたちが元気でいられる場所を支えている活動が地域にはたくさんあります。それらの活動がつないでいるのは、子どもたちだけではありません。実は、大人同士であったり、多世代交流の場であり、活躍の場であったりします。

子どもの居場所づくりを通じて、大人も子どももみんなに関われる地域づくりについて、松本市第三地区まちづくり協議会副会長の降旗都子さんの取り組みから考えます。

【出演者】降旗 都子さん（松本市第三地区まちづくり協議会 副会長）

【進行】木下 巨一さん（長野県生涯学習推進センター 所長）



歴史を知ることから始まった まち歩きの企画と歴史冊子、アニメの制作

私は松本市第三地区のまちづくり協議会の副会長をしている降旗都子です。第三地区はイオンモール松本やあがたの森公園がある松本市の中心市街地で、私は3人子どもがいて、すでに孫が2人いるという、本当にただの主婦ですが、2018年3月までは松本市の保育園で保育士をしていました。また、入山辺という地区で父母と一緒に通いながらブドウを作っています。そんな普通の主婦が、どうやってまちづくりをするようになったのかというところから、まず話をしたいと思います。

イオンモール松本がある場所は、かつて片倉製糸場という日本一の工場でした。私がこの事実を知ったのは10年前で、当時はカタクラモールというショッピングモールでしたが、昭和4年に建てられた古い工場の建物がたくさん残っていて、ここに松本市の近代産業発展の歴史があると知ったところから始まりました。松本育ちなのに全く知りませんでした。それが再開発で全くなくなってしまうと地元の歴史を次世代に伝えられないと思い、行動を起こしたところから始まりました。

2012年からまちづくり新聞を発行したり、2014年には親子でまち歩きをしたり、イオンモール松本の中に片倉製糸場の建物を一緒に考えてデザインしてもらったり、学校の授業でまち歩きをしたりしたのです

が、なかなか広まらないので、2018年度に『お蚕様から生まれたまち』という歴史冊子と、大正時代と現代のまちを比べられる歴史マップを、お笑いタレントのヤポンスキーこばやし画伯をお願いをして作りました。それは、2019年に長野朝日放送の『駅前テレビ』で特集番組としても放送していただきました。少し話題にはなりますが、その後もそれほど広がらず、イオンモールの建物もなんだかわからないという状態が続いていました。

そこで、もっと大人にも子どもにもわかりやすくするために、『お蚕様から生まれたまち』を松本工業高校生がアニメ化してくれました。第三地区のまちづくり協議会はその制作をサポートし、今年1月8日に、イオンモールの古い建物を作ったレプリカの前で制作発表会をしました。

このアニメは、ヤポンスキーこばやし画伯が描かれた『お蚕様から生まれたまち』の絵をデータで渡して、そこから何千枚も描いてアニメーションを起こしていったそうです。夏休みを返上して5人の生徒が作ってくれました。最初に『お蚕様から生まれたまち』ができたときに50冊ほど松本工業高校にお持ちした際、アニメーションが好きな生徒がいるので作れるというお話をいただいたのがきっかけです。その後2年ほど頓挫していたのですが、昨年4月に先生と改めて話をし、やり

たいと手を挙げてくれたのが5人の生徒でした。松本工業高校の先生は電子工学でロボコンなどを実施している方で、たまたま私の息子たちも教わっている先生でした。そのつながりもあったので、直接連絡を取ることができ、お話がポンポンと進みました。

上映後は、生徒たちから「地域のことをアニメ化できてよかった」「良い経験をした」「(松商学園にある)片倉製糸場の初代所長・今井五介の石膏像を銅像化したい」という感想があがりました。この像は国会議事堂にある伊藤博文像の制作者で有名な方ですが、

石膏像のままだと傷んでしまうので銅像にしたいという話が生徒たちのほうから出てきました。

このアニメを1月31日に松本市の小中学校数分、DVDにして、松本市教育委員会の教育長にお届けしました。コロナ禍でオンライン授業や1人1台のタブレット学習が始まっていますし、なかなか子どもが外にも出られないので、地域のことを学ぶためにすごく良い教材だと言われました。今井五介は地域の中でも本当に一部の話ですが、そこから入って、もっと松本のことを知ってもらおう学習になったらいいなと思っています。

地域の思いがつながった「こども食堂」という誰でも集まれる場

2020年12月からは、イオンモール松本の近くの日の出町にある食堂「菜じゃ」で、有志10名ほどで「こども食堂はらぺこあおむし」を始めました。コロナ禍で人のつながりがなくなりつつある中、何かできないかと「菜じゃ」の店主の関さんがおっしゃって、たまたま知り合いだった日の出町の町会長が私に声をかけてくれ、思いのある方たちが動き出しました。町会役員などは全く関係がなく、思いに賛同する人たちだけでつながってできているこども食堂です。現在は40名以上のボランティアが、自分たちのできる時間でやっています。中高生や大学生もボランティアとして活動しています。

忙しいお母さんたちがちょっとでも子どもと話す時間が増えればいいという思いで、手作りにこだわって、季節感のあるお弁当を作っています。子どもだけでなく、一人暮らしの高齢者がお弁当を買いに来てくれます。昨年の12月は200食を超えるお弁当を配布したりとどんどん数が増えていて、感染が落ち着いているときは大学生や高校生が子どもたちと遊んだり、勉強を教えたり、夏休みにも勉強を教える場もつくっています。

こども食堂の話が最初に私のところに来たときは、どうやってやるんだろうというところから始まりました。組織的な活動をやったことがある人はおらず、市の補助金をもらって始めるとしたらちゃんと続けなければいけないため、まちづくり協議会として、私も会議に参加しながらアドバイスをしていきました。役員など全く関係がない人たちが地域のために動き出したのは、すごく貴重なことだと思います。私は、子どもは地域で育てることが重要だとずっと思っていましたの

で、その思いも重なってまちづくり協議会としてつながりましたが、地区の生活支援員にも声をかけたことで、ボランティアに入ってもらおうというつながりもできています。子育て中の親たちは孤立していたり、ワンオペ育児をしている人もいるので、その力になれるところも大きかったのですが、私に声がかかったというのは、今までのまちづくりのつながりがあったからだと思っています。

また、関さんの思いとしては、子どもが何かあったときに気軽に集まる場所になってほしいし、子どもだけではなく地域の人が集まる場所をつくりたい、大人でも誰でも来てほしいというものがありました。関さん自身が、子育て中に寂しさや地域とのつながりを持ちたいという思いがあったそうです。私も人が緩やかに集まれる場所が、まちの中にくつもあったほうがいいと思っているので、公民館とはまた別のところで、地域の人がこういう活動を始めたことは大きいと思っています。

子ども食堂が出来るときに
日の出町の町会長から
声がかかって・・・

- 町会役員でもない人たちが、地域のために動き出した。これは貴重だと思った。
- 子どもを地域で育てるという私の思いと重なる。
- 子育て中の親たちの力になれる。
- 新たな人のつながり生まれる。
- 地域に人が集まる、子どもが集まる居場所が出る



子どもたちの未来を考え、人とつながって柔軟に取り組んでいくこと

続いて、私がまちづくりに関わるようになった経緯を話したいと思います。平成16(2004)年、地区版の公民館報の編集委員を依頼され、「1年でいいから」という話で引き受けました。それがずっと続いていて、今は編集長をやっていますが、それがまちづくりや公民館に関わった最初のきっかけでした。

この公民館報の会議をしていると、記事の内容を決める際に、町会長や民生委員からいろいろな話題が出てきます。その中で地域の情報を得て勉強をさせていただき、今も問題点や課題を考えるいい機会になっています。その会議で、カタクラモール(片倉製糸場跡地)の再開発について話題になり、みんな気になっていることだったので、取材をしたいと持ち上がったのが2011年です。ただ、取材を申し込んでもなかなかうまくいかないのが、主事と考えたのは、まずはまちづくりを学ぼうということで、公民館のまちづくり講座を企画しました。そして、2012年6月から6回講座を行いました。

その後、何年か開講しましたが、最初の6回講座の3回目で、片倉製糸場がかつて日本一の工場であったという歴史を初めて聞き、古い建物のことも勉強しました。その話を帰宅後に子どもたちに話したら、なぜ自分たちはこういう歴史を学校で習わなかったかと聞かれ、教える人がいないことに気づきました。学校の先生方は転勤族なので、地域の人が教えなければいけないのですが、私たち大人も知らない話だったので、まちの人たちに歴史を伝えていくことを始めなければいけないと考え、まち歩きなどを始めました。

それと同時に、カタクラモールを運営する片倉工業にも、歴史を大事にした再開発をしてほしい、地域の人の声を聞いてほしいという手紙を、当時はかなり無謀でしたが送りました。そして、同意をもらった講座の参加者により、まちづくりを考える会を発足して送り主とし、いろいろな活動を始めました。2012年12月にはまちづくり新聞も初めて発行しましたが、地域の人のいろいろな意見を拾い上げたいと思い、新聞の中に自由に書き込みができる紙をつけ、公民館にまちづくりポストを作りました。また、古い建物の保存のことや、カタクラモールの再開発で開業する予定だったイオンモール松本に求めるお店などのアンケートを作って配りました。すると、意外と多くの反応があり、当時、通常は4割ほどの回収率だったものが、町会によっては7割を超える回収ができました。その意見を

片倉工業やイオンモールに送り、イオンモールからはマーケティング調査の感謝の言葉をいただきましたが、やはりきちんと地域の意見を上げるにはまちづくり協議会を作らなければいけないと考え、協議会を発足しました。それによって、町会連合会などと一緒に地域の意見をイオンモールや片倉工業にあげられるようになりました。

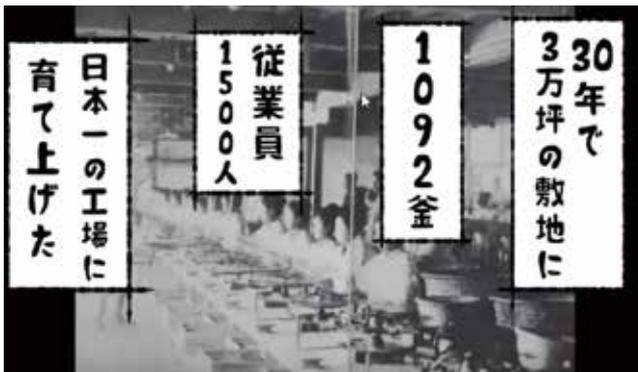
こうして、私たちの活動や思いが町会長たちの間にもどんどん伝わり、地域の人たちにも広がってきて、まちの人の考え方もなんとなく変わってきたのを感じました。それでかたちになったのが、先ほどお話した、古い建物のデザインなどです。外と断絶したまちをつくらないでほしいということで、ガラスをなるべく多く使った建物にしてもらい、上空通路を露天にしてもらったり、椅子をたくさん置いてもらったり、3階に展望台を作って山が見えるようにしてもらったほか、アンケートに映画館を希望する声が多かったので、イオンシネマもできました。道路は渋滞緩和を考えて歩車分離信号機を提言し、イオンモールの土地を拡幅してもらって、公道として使わせてもらっている状態です。

こうした取り組みは、私だけでは何も進まなかったと思います。まずは主事がまちづくり講座を提案してくれ、その講座に私も参加することでいろいろな知識を得て、様々な発想が生まれました。当時はまちづくり協議会や地域センターもなかったのが、まずはやりたいという思いがあるキーマン、私の場合は公民館長や主事がいろいろな活動を柔軟に対応してくれたことがすごく大きいものでした。それが新しい活動につながったと思っています。「やろうよ」というだけではなかなか立ち上がりず、そこにいろいろなノウハウを持った人たちをうまくつなげていくと、ちゃんと立ち上がります。そのいろいろなつながりをつくってくれるところが公民館でした。

そして、このようにつながるために大切なのは、固定観念を捨てて柔軟な考え方を持つことです。イオンモールの再開発では、片倉工業という企業に対して、公民館がどう関わるかを主事はすごく悩んだそうです。それは私もわかっているのですが、その中でやってみたら、結果的に多くの動きが見られました。まずはやってみることが大切ではないかと思っています。当時は10個の要望が1個でも通れば成功だと公民館長に言われて始めましたが、思い続ければいろいろなところに波及してつながると感じています。

そう考えると、本当に全てに共通する思いは、子どもが一番のキーマンであり、私たちは次世代に何を残せるのかを地域で考えていくということです。元保育士なので、子どもに関わる仕事をずっとしていたことも大きいのですが、今の子どもたちは親と学校ぐらいしかつながりがなく、広い世界とつながる機会が少なく、経験値も少ないので、自分の住んでいる地域のことをもっと知ってほしいという思いがあります。子どもたちには歴史を知ってもらうことを切り口に、もっとま

ちのことを学んでもらうことで、社会性が広がると思っています。そのために、なるべく子どもたちに関われる活動をやっていきたくと思っています。また、今、私たちが真剣に考えたまちのことを20年後の子どもたちが背負うという思いでずっと動いています。そのためにも、まずは地域のことを知って、そこで課題が浮き彫りになったら、人をつないで柔軟に取り組んでいくことがすごく重要だと思っています。



まとめ 木下巨一さん

やはり、公民館がうまく機能している地域はいろいろなことができる、地域にはきっと降旗さんの公民館報の編集委員のように、きっかけさえあれば、すごく素敵な取り組みができる人はいっぱいいらっしゃるんだろうと想像しながら聞いていました。私も子どもが自分の考えや判断でいろいろな物事にチャレンジしていくことがとても大事だと思っています。そのときに大人にとって大切なことは、自分自身を常に磨いておき、その姿を周りに見せることです。その影響を子どもが受けていくと思います。

「むすびえ」というこども食堂のネットワークの湯浅誠さんによると、2019年から2020年にか

て、こども食堂の数が全国で3600カ所から5000カ所に増えたそうです。つまりコロナ禍で急速に増えたのは、子どもたちの貧困や格差がコロナ禍ですごく見えるようになり、自分にできることを自発的に役割としてとらえ、活動を始める人が増えたということです。その思いを共有し、役職や立場を超えてつながっていけば、お互いの得意なところを掛け算した取り組みができそうです。そう考えると、公民館のような社会教育活動と社会福祉協議会とつながる地域が抱える活動は、どこかで重なることは可能かと思っています。



学びと出逢いからはじまる 豊かな地域づくり

～社会教育、福祉教育でヒトがつながる地域がつながる～

地域共生社会の実現に向けて制度や分野を超えた連携が進められています。しかし、それにはお互いを理解し尊重し合うことが重要です。そこで、社会教育と福祉教育の接点を探り、両者の協働を醸成し、誰もが安心して暮らせる豊かな地域づくりについて考えます。

地域に対して何を問うか、どこに軸足を置いて、地域に対して活動していくのか。その物差しをディスカッションの土台に据え、参加者がブレイクアウトルームで話し合いながら進めていきます。

【ファシリテーター】下倉 亮一さん（長野県長寿社会開発センター シニア活動推進コーディネーター）

【聞き手】小池 玲子さん（長野県社会教育委員連絡協議会 会長）

山田 翔太さん（御代田町社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター）



コロナ禍で新たな出会いが生まれた歳末行事と「おりづるチャレンジ」

【出演者】中村 裕二さん（下諏訪街社会福祉協議会 係長）



下諏訪町社会福祉協議会の中村と申します。毎年行っている歳末行事と「おりづるチャレンジ」で取り組んだ内容と、そこで感じたこととお話します。

バザーと街頭募金は私が入職する前の15年以上前から行っています。地域に支えの心を広げたいという目的で、活動ベースで行っているもので、募金の収益の用途はその時々によって違ってきます。過去には一人暮らしの高齢者におせちを配布したり、障害者施設の寄贈、近年は災害義援金など、ボランティアの方々と地域に投げかけたい福祉のテーマを話し合いながら取り組んでいます。コロナ禍の令和2年度、3年度は経済的に困窮される方が多いので、食糧支援を目的に実施しています。

今必要としていることを目的に訴えているので、ニュースの中の話題が自分たちのまちにもあると、住民に身近に捉えていただく機会になっているのではな

いかと思っていますし、福祉の活動に気軽に参加できる入口をつくれているのではないかと思います。食糧支援については、社協でも、歳末に限らず年間を通じてフードドライブと寄付を募ってきました。その上で年末に食料の配布会を行います。今は食糧支援の文化が根付き、定期的に家に余ったものを届けてくださる方もいます。食糧支援のために寄附をしていただく輪が広がってきていると思っています。

もうひとつの「おりづるチャレンジ」ですが、コロナ禍でなかなか事業ができない中でつながりを感じてもらえることとして、他市町村でやっている取り組みを参考に「おりづるチャレンジ」という名前で始めました。折り鶴を集める取り組みです。折り鶴作りは、多くの町民や高齢者施設、障害者施設など、今までつながりなかった方々にも協力していただいて、3ヵ月ほどで3万羽程度を集めることができました。最終的には



成人式の会場でお披露目し、コロナの収束祈願や新成人の方々への思いを広めることができ、一体感やつながりを少しは持てたのではないかと感じています。

コロナ禍前は、人をどう集めるかを考えていましたが、コロナ禍になり、また違う視点での地域へのアプローチの仕方を濃厚に学んだような気がしています。この「おりづるチャレンジ」が終わるときに「また何かやれることがあれば」と名残惜しむ方々が多くいらっ

しかったので、今は新年度に向かって子どもたちやお母さんたちの手助けになればと、雑巾を集める「ぞうきんプロジェクト」も実施しています。

これらの活動を通じて、今まで社協と関わったことのない方々にも協力を得られたり、新しい出会いができたように思っています。いい意味で、福祉に関わるハードルを少し低くでき、多くの方々とのつながりを持てたことが、この活動のいいところだったと思います。

ライ麦ストローを地域で作ри、持続可能な地域社会を

【出演者】山田 翔太さん(御代田町社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター)
東城 美苗さん(御代田町社会福祉協議会 ケアマネージャー)



続いて、御代田町社会福祉協議会の取り組みをご紹介します。実際に携わっている職員は、福祉分野にとどまらず、いろいろな分野にオーバーラップしています。やはり福祉の問題は様々なので、福祉分野を超越することが重要だと思っています。その取り組みのひとつが、ライ麦の細い茎を使って制作しているライ麦ストローの取り組みです。

この活動が始まったきっかけは、御代田町に移住されたクラフト作家の上原かなえさんから、ヒンメリ(ライ麦を使ったフィンランドの伝統的な飾り)の制作に使わない太いライ麦を有効活用できないかという相談があり、社協の持つネットワークでお手伝いができるのではないかと3年前につながったことでした。その後、イベントのPRや、社協や上原さんのつながりを通して、麦の生産者、デザイナー、ボランティアが集まり、プロジェクトとしてのかたちがまとまりました。社協内で完結するのではなく、住民主体で異業種の方とつながって何かできればと考えていたこと、移住者がコロナ禍で東京への行き来ができなくなって時間ができ、町内で何か役に立ちたいという思いが高まっていたことなど、いろいろなタイミングがぴったり合ったことでプロジェクトとなりました。

プロジェクトは、町内の3農家が育てたライ麦をボランティアが播種から刈り取って天日干しまで行い、社協のデイサービスや就労継続支援B型事業所で茎

をカットします。その後、作業所で長さや太さを揃え、洗浄、煮沸、乾燥、梱包して商品化まで行っています。サービスでは、リハビリやレクリエーションでボランティアに携わっていただきながら、和気あいあいと作業をしています。昔、ライ麦を育てていた方も多く、ストローにしたり、虫かごにしたりしたという思い出に花が咲いています。ボランティアの方からは、一緒に作業できて元気になると言ってもらえますし、作業所では安定的な仕事として定着してきています。出来上がったストローは、オンラインショップや近隣の飲食店、産直、マルシェなどで販売しています。最初に町の応援も得てスタートしたので、今年からはふるさと納税の返礼品にもなりました。他市町村の方が視察に来られたり、小中高生からも学習に使いたいと提言があったりと、様々な方に関心を持ってもらっています。ライ麦ストローを地域の方々と一緒に作ることを通し、自然環境や持続可能な社会の実現に向けて意識を深めることや、人と人がつながることを見直すことで、地域資源を生かすヒントや答えがあると思っています。



認知症の当事者が活躍する

上田市豊殿地区の「hinata bocco とよさと」

上田市の上田・菅平インターから車で10分ほどの場所にある豊殿地域の「hinata bocco とよさと」と呼ばれるコミュニティーカフェです。浅間サンライン上にある、農協の店舗として利用されていた大きな建物が空き店舗になって、半分を小規模多機能という高齢者の通う施設にし、銀行スペースだった1階の部分がカフェになっています。認知症の当事者が生き生きと活躍する、このカフェが立ち上がった経緯をご紹介します。

なんと20年前にさかのぼります。地域の直売所で一緒に働いていた仲間が病気になり、地元ではなく佐久総合病院で亡くなったそうです。その頃はまだ上田市の医療が充実していなかったため、農村地域の豊殿の人たちは、病気になると佐久総合病院に行って治療するのが当たり前でした。そこで、地域住民は、地元で病院があれば離れた土地で亡くならず、住み慣れた地域で最後まで暮らすことができるだろうと、病院を建てる誘致運動が立ち上がりました。結果的に病院を建てることは様々な条件があるため、特養が設立

されました。それに対し、自分たちも高齢者を支える取り組みができないかと考えた住民は「安心の地域づくりセミナー」という学びの場を設けます。農業が一手間空く冬の1～2月に、認知症や介護予防、保険など、高齢者にまつわる学びの場を自分たちで立ち上げました。それが20年ほど前で、今もずっと続いています。さらに、普段自分たちが使っていた農協が空き店舗になり、住民たちはまた何かできないかと考え、交流の場をつくろうと出来上がったのが「hinata bocco とよさと」というコミュニティーカフェでした。

紆余曲折あり、皆さんは「hinata bocco とよさと」で認知症の方が働いていることに着目しますが、実は評価しなければいけないのは、そこに至る20年間のつながりづくりであったと私は思います。



まとめ 下倉 亮一さん

上田市の、とある農村地域で、近所の認知症の高齢者のゴミ出しトラブルが起きていました。もし、こういった高齢者がお隣に住んでいたらどうするかというグループワークを長野の中学校でも行いました。中学生なりの距離感を持って、いろいろな意見を出してくれ、トラブルの原因は一体何だろうと話し合いました。普通に考えると認知症ということですが、中学生たちは気づいたんです。目に見えない根本的な原因は孤立であることを。関わり合ってくれる人がいないから、こういったトラブルが地域で起きているということです。つまり、私たちの暮らしは住民同士の関係次第で大きく変わってくるということです。

その上で、3つの地域の取り組みをご紹介します。取り組みにはいろいろな物差しがありますが、3つの事例から、関係性をつくることが重要であり、それに対していろいろな取り組みが生まれているこ

とがわかりました。

今日のセッションは、社会教育と福祉教育の協働が大きなテーマでした。

地域でいろいろな関わりをつくっていく上で立場が違いますが、目指すところは地域づくり、関わりづくりであるというのが今日のテーマです。

関わりをつくるというのは、とてもシンプルなテーマではあったと思います。しかし、認知症の事例でも紹介しましたが、トラブルは個人の問題として捉えがちで、その人が地域からいなくなればその問題やトラブルがなくなると考えがちですが、それは違います。そのことに気づいたのが、先の中学校の生徒たちではないかと思います。最近、ギクシャクしている関係性があれば、身近な公民館や社協に相談に来てください。それが地域住民の暮らしを支えることにつながっていくと思います。



まとめ 山田 翔太さん

優しい活動は、地域の中で伝播します。下諏訪の活動を聞いて感じたのは、歳末バザーで支援を受けた方が一方的に受ける立場ではなく、場合によって支援をする側にも立つので、相互援助の理解や自立、共に支え、支えられるような中で自立するのが重要だということです。私は子育て世代になるので、普段、地元や仕事や子育てに追われていると、地域のことは視野狭窄になり、やはり気軽に参加できません。そういう点では楽しむ仕掛けづくりが大切だと思いました。

また、「hinata bocco とよさと」の活動は、打ち合わせの中で、皆さんが結構ケンカもすると話していたのが印象的でした。ケンカができるのは、意見をぶつけ合え、ケンカを通じて相手との適切な距離感をつかむことなので、よほど皆さんが地域のこと

を話し合っていると感じました。まさに地域をつくっていくのは自治活動で、小さな気づきから共感の輪が生まれ、地域と共に育ってきた皆さんが同志として地域づくりの種まきや仕掛けづくりをしていると思います。若い人たちに引き継ぐ地域づくりの芽を皆さんで絶やさず、水をまいて一緒に育てていると感じました。

今のつながりは、アフターコロナでも生かせるつながりです。その関係性の中で生かされていく日々の生活を大事にしながら、自分も大切にして、地域の皆さんにもつながりを大切にしてもらい、仕事や地域の方との関わりを深めていただきたいと思います。



まとめ 小池 玲子さん

下諏訪の活動では、私は食料配布に参加しましたが、本当に優しい活動だと思いました。声高にお金を集めて何かをするわけではなく、ごく普通の流れで住民の皆さんが活動に協力したり、募金活動をしたり、バザーに参加したりしていました。コロナの影響で職を失った方や生活困窮に陥った方に対し、普通の住民はテレビの中の世界のことだとしか思わず、自分の3軒隣の人がまさか生活困窮に陥っているなんて気がつきません。「あの家はちょっと変な感じがするけど、放っておこう、関わり合いたくない」というのが本音かと思います。きつい言い方をすれば、他人事だから、生活困窮や貧困の人は行政に何とかしてもらいたいという、困った人を排除する動きになりがちです。中には噂をしたり、非難する行動に走る人もいますが、今回は、バザーに出すものを集めたいと言ったときに、協力してくれる人が私たちのまちにもいると気づかせてくれる取り組みでした。いい意味で、見て見ないふりをしながら募金や寄付を気にかけて、社協に持っていきやすいという気づきから課題解決につながる、とてもいい活動だと思いました。

また、「hinata bocco とよさと」の活動を知ったときは驚きました。病院をつくるために学んだ結果、

老人ホームができましたが、それでおしまいではなく、認知症の高齢者でも暮らしていける施設、交流の場をつくろうと奮闘しました。次から次へと自分たちの気づきが地区の新たな財産の積み重ねになっていることが、素晴らしいと感じました。

福祉教育と社会教育という難しい話だと思うかもしれませんが、地域からすると、なんでそんなことを、と思うかもしれません。ただ、どちらも、共に生きていこうという内容です。実際、赤ちゃんには、人を非難したり、攻撃したり、差別したり、といった意思がありません。しかし、成長の過程で踏みにじられたりする中で、人を排除する心が育まれています。そこで、社会教育、福祉教育は、0歳から始めないといけません。小学校から始めるのではなく、地域の中でその心を育むことをきっかけづくりとして始める必要があります。そして、社会福祉協議会の皆さんがコーディネーターと一緒にやっていけば、未来には因業爺さんはいなくなると思います。みんなで仲良く暮らしていく世界へと学んでいけたらいいなと思っています。



若者の自立を支える ～児童養護施設と地域がつながる・ 見守る仕組みをつくろう～

コロナ禍で若者たちの就職難が懸念される中、親の支えがない若者たちは、より困難な状況に置かれています。地域では、まいさぼ等の相談機関が強化されつつありますが、児童養護施設を巣立った若者が相談に訪れることは稀な状況です。彼らに「安心して頼っていい」ことを伝えるため、専門家もボランティアも、今できることを考えましょう。



児童養護施設の卒園者の支援のために地域社会ができること

【助言者】太田 一平さん（NPO法人STARS代表理事、養護施設八楽児童寮 寮長）

愛知県にある児童養護施設の八楽児童寮で施設長をしています。児童養護施設の仕事は、いろいろな事情があって親と一緒に暮らせない子どもたちをお預かりし、社会自立をさせていくところまでですが、数日前に新聞に大きく取り上げられたものが、来年度の児童福祉法改正です。児童養護施設の入所期間年齢の上限撤廃が大きく報道されました。

というのも、昨年度、国が初めて、施設や里親家庭などで生活している人の生活やサポートに関するアンケートを実施し、ケアリーバー（児童養護施設卒園生）の社会自立後の実態も調査しました。その結果、民間の賃貸住宅で生活しているケアリーバーが50.2%。親元で生活している子どもが11.9%。会社や学校の寮で生活している子どもが11.6%。つまり、ケアリーバーの約半分はアパート暮らしをして、自立して生活している実態がわかりました。しかし、施設で生活していた子どもが、いきなり社会に出て一人で生

活するのは、なかなか困難なことで、社会に出てからの何らかの支援が必要なことは言うまでもない事実です。アンケートの結果を見ると、施設を卒園した子どもたちは非常に苦しい状況の中で生活している実態が伺えました。そして、新聞の見出しに「若者の2割が生活困難者である」と大きく報道されました。

地域に戻って暮らす子どもたちに対し、地域社会のいろいろな社会資源がどうサポートし、そのプラットフォームをつくり上げていけるかは、私どもと地域の皆様方のこれからの取り組みであり、国の施策の大きな課題のひとつだと思っています。



卒園後も子どもたちが頼れる施設であるために

【出演者】宮下 順さん（飯山学園 園長）

飯山学園に勤め始めて25年、園長に就いて8年目です。送り出していった子がたくさんいますが、一人の子の話をします。その子はいろいろなタイミングがあって、よくメディアに取り上げられる子ではありま

した。小学校2年生の頃に虐待で入所し、長らく飯山学園で育て卒園し、都内の大学に進学しました。小さな頃から何でも自分でやらなければ、という思いが強い子でした。施設側としては、いかにこの子に近隣

の人間を頼ることを刷り込んでいくかがテーマでしたが、なかなかうまくいかず、人に頼ることをしっかりと身につけさせることができぬまま大学に送り出してしまいました。しかし、大学進学後もメディアに取り上げられる中で、彼女が「施設に帰っていいんだなと今回思った」という一言を吐いたんです。そのときに、やっと「頼ってもいいのかな」という思いが少し芽生えてきたのかと思いました。そして、彼女が大学の卒業も近くなってきた頃、部活動の引退ブログで「仲間に頼ることができるようになった」と書いていました。「昔は人に頼ることは退化だと思っていたけど、進化なのかもしれない」と書いていて、僕もちょっと胸をなでおろした次第です。

僕も何年前かは「後ろ盾のない子どもたちを」と平気で言っていたのですが、私たちが後ろ盾となることが大事であり、少なくとも内輪の人間が「後ろ盾がない」なんて言うてはいけないと今は思っています。

こうしたことから、頼らないという選択をしてしまう子どもたちをなくしたいと思っています。やはり、卒園生の中には借金や退職などの問題を抱える子がいますし、警察に厄介になる者もいます。そんな子どもたちに関し、どうしてこうなるまで何も言ってこなかったの？と思うこともありました。我々が日々細かい連絡を取ることを怠っていた部分も多分にあると思うのですが、今も現在進行形で卒園した何名かの子たちと、そういったやりとりをしています。生活保護や自己破

産の手続きを一緒にやることもあります。そういう子どもたちと日々向き合っている中で、我々もそうなったときにどうすればいいのか、何かできる方法がほしいとは思っています。

そのような流れの中で、反省の話をさせていただきまます。僕らは去年くらいまで、「何かあったら頼っておいで」と言って、卒園生を送り出していました。でも、連絡するのは困ったときのオプションだと子どもたちは捉えていたと気づかされるが多々ありました。僕らは頼れたり甘えたりできる先を、オプションではなく標準装備にしていくべきです。片手間に頼られるのではなく、頼られるのはまっとうな仕事だということを、今一度、頭に入れておかなければいけないと思った次第です。

地域に期待することは、児童養護施設の卒園者に限らず、困った人が簡単に手を差し伸べてもらえる仕組みをつくり、当たり前に見えるようにしてほしいということです。そんな世の中にするために、何ができるのかまでがなかなか思いつかないので、そのモヤモヤ感を皆さんと共有していきたいらと思っ



卒園生のアフターケアに向けた3つの提案

【出演者】 傳田 清さん (NPO ホットライン信州・信州子ども食堂ネットワークスタッフリーダー)

私はもともとは先の宮下さんが園長を務める飯山学園で約10年間勤務していました。そこで思ったことは、虐待になってから入所するのではなく、その前段階で虐待の予防を地域でできないかということです。そして、いろいろと模索をして「信州Gプロジェクト」という団体を立ち上げました。ほかに「信州子ども食堂ネットワーク」で子ども食堂支援をサポートしています。子ども食堂は現在、県内120ヵ所で実施されています。この「子ども食堂」は、まちのプラットフォームだと考えています。簡単にいうと土台という意味です。というのも、子ども食堂は決まりはないんです。本当にいろいろな方たちがまちでつながることができるコミュニティの場所が子ども食堂です。今、貧困など

様々な問題がありますが、その根本は、やはり相談相手がないことです。そこで、こども食堂というプラットフォームを使って地域温度を上げていくことは、これからの時代の中で非常に大事だと思っています。

今回は具体的な提案をしたいと思います。一つ目が、卒園生サポートとしてのライフスタイル手帳(仮称)です。療育手帳などがある子は、お金の面でも行政的な面でも社会的支援は受けやすいのですが、何もないボーダーの子たちは、卒園後、自分で生きていかなければいけません。やはり大切なのはアフターケアであり、困りごとがあったときに連絡をしたらサポートが受けられる療育手帳のようなものを卒園時のお守り的に作れないかと思い、宮下さんや県社協の



方たちと話をしています。

二つ目の提案が、長野県に77カ所ある市町村社協との連携です。例えば卒園生が他地域で何かあった場合事前に社協と連携し、

まいさぼなどを使いながら即対応できることが必要だと思っています。

そして、最後が県内120カ所のこども食堂との連携です。例えば他地域に行った卒園生に対し、その地域のこども食堂を展開している方に関わってもらったり、卒園生がボランティアに入ってもらい、その対価として食材をもらったり、ある程度社会に出て孤立しないように早めの見守り体制ができれば、子どもたちの安心につながると思います。実際に今、児童養護施設を卒園してこども食堂に関わってもらっているボランティアがいます。リストカットや自殺未遂を繰り返している

方ですが、こども食堂のボランティアに参加し、食材を一般の方に配ったことで「ありがとう」と言われ、生きる目的を持ちました。

まだ叩き台ですが、どれも一団体ではできないことです。この三つの柱を県社協やいろいろな団体と揉みながら、ぜひ志を持つ方に力を貸していただき、かたちにしていきたいと思っています。

それと、今後の目標は、長野県にある370の各小学校に対してこども食堂をつくることです。徒歩で行ける範囲に誰でも来られる場所があれば、地域が温まってくるという感覚です。そして、社協とまずはお互いを知り、つながりをつくっていかたいと思っています。



まいさぼによる卒園生の支援とポイント

【出演者】山岸 舞さん(長野県社会福祉協議会 主事)

まず、生活就労支援センターまいさぼとは、2015年の生活困窮者自立支援法施行により、県および県内各市が設置している自立相談支援機関です。県内19の各市と58町村を9圏域に分け、25カ所に設置されている相談機関で、どんな相談でもまずお話を受け止めて聞いて、いろいろな関係機関と連携しながら、その方らしいマイサポートプランという支援計画を作って継続的に支援をしていくことが事業内容です。経済的に困窮している方だけを対象にしているのではなく、最低限度の生活を維持することができなくなる恐れがある方も対象にしています。

まいさぼという名前は長野県の愛称で、全国ではあまり通じないのですが、県内ではこの名前です。実施機関は市街村の社会福祉協議会で、市は行政直営で行っています。郡部では県社協が行っていますが、県域的には10カ所と幅広く担当しているので、より身近な機関で相談できるようにと、町村社協をまいさぼ出張相談所に位置づけています。

実際に支援事例をご紹介します。10代男性のケー

スです。もともと卒園前に児童養護施設の職員から、退所後が心配で、地域で支援者とのつながりをつくっておきたいとまいさぼに相談がありました。施設の職員とご本人、社協の職員、まいさぼの4者で顔合わせを行いました。そのときすでに、役場とはつながっていました。いろいろとお話を聞く中で、特にまだ緊急的に支援が必要ではなかったのですが、今後、社協で見守りをしていくこと、そして、まいさぼは就労の相談を受けていくことで確認をしました。その後、退所して順調に仕事をしていたのですが、いろいろとあって離職されます。そ

れから就職活動が、なかなかうまくいかず、役場からまいさぼに就労支援の依頼があり、具体的な支援を開始しました。まず、就労面と金銭面をメイン



に支援の方針を立てました。就労面は、ご本人はバイク関係の仕事に就きたいという希望があったので、ご近所のバイク屋と交渉しました。しかし、なかなか就労が決まらず、今は日払いのアルバイトで就労をしています。その方の希望に沿った働きやすい職場を開拓し、間に入って取り持っていくこともまいさぼの支援です。金銭面は、計画的にお金を使っていくのが苦手なため、お金の使い方の確認もまいさぼで行っています。一番大きいのが心身面の支援です。好きなバイクの話で盛り上がり、少しずつ雑談から距離を縮め、気軽に話ができる関係を構築しています。

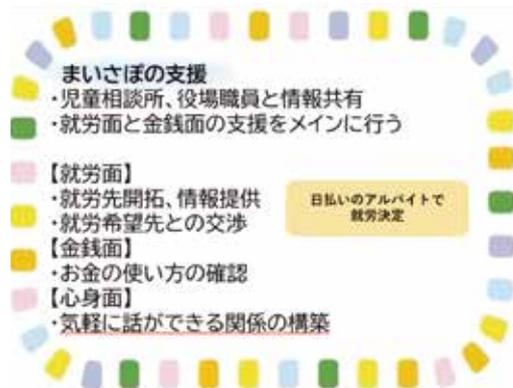
今回、この支援が割とうまくいっているポイントの一つは、施設の職員や行政の方からまいさぼにつないでくれたことが大きいのですが、何か起きたときにすぐに気がついてくれ、声を上げてくれる人の存在が大事だと思いました。また、困ってどうしようもなくなる前から関係づくりをしていたこともポイントです。そして、気軽に話ができる関係の構築も大切です。バイク屋の件も、仕事では難しいとしても、地域に顔見知りがいってつながりがあることが大事です。

今回改めて、まいさぼは児童養護施設のことをあまり知らないと感じたので、まずはお互いを知り、担当職員の異動や退職を踏まえ、職員同士よりも、組織としてつながっていくことも大切です。そして、どれだけ依存先や頼れるところを増やしていくかが、とても大切だと感じています。

最後に、県社協で行っている「長野県あんしん創造ねっと」の取り組みを紹介します。入居保障生活支援事業と身元保証就労支援事業という取り組みがあり、

支援のポイント

- ◆制度に繋がられる人、コミュニケーションが取れる人と繋がりが有る⇒早期発見・早期介入
何か起きた時に気づいてくれる人の存在、声を上げてくれる人の存在
- ◆退所前からの顔合わせ⇒困る前に関係づくり
機関どうしが相談しあえる関係
- ◆気軽に話ができる関係の構築
いかに信頼関係を築いていくか



入居保障は住む場所を必要としているにも関わらず、身よりがなくて保証人になってくれる人がいない方に対し、家賃の滞納分の保障をするほか、地元社協がその方の入居後から見守っていくことで、保証人がいなくても住居確保を目指す事業です。身元保証も就労支援の際に保証人がいないことで雇用を断られてしまわないように、就労先に与えた損害に対しての見舞金や市町村社協による見守りによって、保証人を立てることなく雇用に結び付けることを目指す事業です。どちらもまいさぼで申請をしていただきますが、こういった事業をもっと活用していきながら、できる支援があると感じています。

まとめ 太田一平さん

子どもが成長し自立するには、自己受容ができて初めて、他者信頼ができます。児童養護施設では親から虐待を受けた子どもが6割といわれており、自分が悪いというネガティブな受け取り方をしている子どもが多くいます。そういった子が自分を成長過程で自己受容できるようになることが、施設での最初の取り組みになります。そこから初めて他者信頼ができ、居心地のよい居場所ができ、社会自立ができるようになります。

今、全国の児童相談所に寄せられている虐待通報件数は20万5000組ですが、これは氷山の一角

です。そこからさらに児童養護施設入所するケースは、わずかに3.8%です。残りのケースは放置状態です。そうすると、虐待予防のために必要なことは教育です。そこで、これからのこども食堂は、親御さんを含めて虐待予防の教育という機能を持つていく必要があります。

お三方の発言を聞き、本当に長野県は頑張っているという強い印象を持ったことを、最後につけ加えさせていただきます。



ま と め

垣根をこえて、協働を進めていくためには

まちづくりには住民や専門職、ボランティア、NPO等の様々な主体の関わりが重要になります。それぞれでバラバラに活動するのではなく、お互いを理解し協働することで大きな力となります。1日を通して学んだ地域の力や各分野の取り組みからのまちづくりを考えます。

- 【コメンテーター】加山 弾さん（東洋大学教授）
 天野和彦さん（福島大学つくしまふくしま未来支援センター
 特任教授）
- 【コーディネーター】木下 巨一さん（長野県生涯学習推進センター 所長）
 加山 弾さん（東洋大学教授）



フォーラムに参加した出演者の感想

セッション1-A ● 高砂 美織さん（塩尻市社会福祉協議会 主事）

今日参加させていただいて、改めていろいろな事例で感じたのは、公民館も社協も、自分たちの地域に住む人が、どうやったら幸せを感じながら地域で生きていけるか、そのために自分たちは何ができるのかは共通しているということです。

日頃の業務として地域づくりを担っているのは当たり前ですが、社協だけではないということをお自分の中に置いておくこと。困ったときに、社協だけで

解決できないことを社協がそのままにしてしまうと地域づくりは終わってしまいますが、公民館などいろいろな機関に自らつながっていくことで始まる地域づくりがあると、今日を通して感じました。



セッション1-B ● 石井 布紀子さん（NPO法人さくらネット 代表理事）



セッションでの私の気づきからお話します。3つのつなぐ、開く、が見えたと思っています。私は被災地支援に長く関わっていますが、江戸時代からのコミュニティの

自治の営みを引きずっている地域には、防災・減災力があると思っていました。今日、豊丘の事例で、自治の境界線を地図に書くためにいろいろな協議があった話を聞いて、まさに支え合いマップ作りは地域の時間をつなぐツールになり得ると感じました。

もうひとつは、空間をつなぐ開くことです。どの単位で地図を作るのがいいかという協議の中で、自治会エリアか、もう少し小さい町会のエリアか。大きな市では、小学校区のエリアで人が集まって地図を作

るのが良いとなりました。そうすると、地図を作る拠点も災害時の避難拠点も、やはり公民館や地域会館が上がってきて、その可能性が見えました。まさに今日の天野先生のお話につながるひとときがありました。支え合いマップで空間をつなぐ、外部支援者などにも開いていくことが可能かと思いました。

最後に、世代をつなぐ、人が人をつなぐということで、今日のマップ作りの事例でなかったのは、子どもたちの関わりです。子どもたちが関わることでの変化は、私は全国事例をたくさん知っているのですが、今後はぜひそこにつなげたいと思っています。世代をつなぐ協働の歩みに、これから支え合いマップを広げていくための関わりを自分の中で考えていきたいと思いました。

セッション2-B ● 降旗 都子さん (松本市第三地区まちづくり協議会 副会長)

コロナでなければ、Zoomではなく皆さんに直接お会いしてつながりたいと思ったのが実感です。私は常日頃、次世代に安心してバトンを渡せる住みやすいまちを目指して活動しています。それには子どもも巻き込み、世代を超えたつながりの場をたくさんつくっていくことが重要だと思っています。基調講演の天野先生のお話にもありましたが、自分たちのまちを自分たちで作るという住民自治が改めて大事だ

と感じました。また、固定観念にとらわれず、柔軟な考え方と組織を超えた協働がまちづくりには重要だと思いました。それをまずはやってみることで、いろいろなことが生まれてくると改めて感じた次第です。



セッション3-A ● 下倉 亮一さん (長野県長寿社会開発センター シニア活動推進コーディネーター)



御代田に引っ越してこられた福島の方とのつながりのエピソードです。御代田で居場所づくりの取り組

今日は御代田町地域福祉課の山田さんの事例をご紹介いただきましたが、山田さんと話して印象深く残っているのが、セッションの中では出てこなかったんですけど、

みをする中で、居場所の鍵の開け閉めを福島からいらっしゃった方をお願いしたことで、その方が地域とつながるきっかけができたということでした。つながりというのは、実は非常にありふれたことです。なかなか難しいこともあるんですが、やはりそういう小さなことが関わりをつくり、地域を支えることにつながっていくと改めて感じました。

セッション3-B ● 長峰 夏樹さん (長野県社会福祉協議会まちづくりボランティアセンター所長)



小学校区の400弱にしなければいけないという具体的な宿題をいただきました。また、支援のために専門職同士がもっとつながる必要があるという宿題

3-Bを進行した、長野県社会福祉協議会まちづくりボランティアセンター所長の長峰です。発表していただいた傳田さんから、今は長野県内に120あるこども食堂を、

もいただきました。特に児童福祉の専門職と社協、地域福祉関係者は、もっとつながらないといけません。さらに、児童養護施設に在園中から子どもたちにライフデザイン手帳のようなものを作って配布し、地域で頼ってほしいと思っている大人がたくさんいるというメッセージを届けたいという提案もいただきました。今日これを聞いた皆さんは実現する責任がありますので、みんなで頑張りしたいと思います。



天野 和彦さん(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授)

今日は様々なことが自分の中で残りました。地域を支える、まちを盛り上げる、こんな地域になったらいいな。そんな思いを持った住民が暮らしの中で学び、気づき、動き出す。人同士の出会いが重なり合い、豊かなまちづくりが広がっていく。これが、きっとみんなの思い、願いなんだろうと思いました。専門職同士が垣根を超えて協働を進めるために、皆さんがつながったり仕組みづくりに取り組んでいました。でも、あえて聞きますが、そもそも協働って本当に必要ですか？協働しなければという前提から始まっていませんか？そこで、協働が大事だということを、もう一度自分に問い返してほしいと思います。そして大事だとするのなら、その理由を自分の言葉でそれぞれが語れるようになり、周りの仲間たちと、やはり協働が大事だということを確認し合っていくことが、地域社会を描くものになると思います。協働というのは、立場は違っても同じ目的を持つ者同士が対等に意見交換して取り組みを進めていく、まさにイコールパートナーシップです。これが協働を進めるときの大きなキーワードになると私は思っています。パートナーシップというスピリッツのもとに協働が繰り返されていけば、またつながっていくと感じた時間でした。

それと、それぞれの地域でいろいろな動き方を報告していただきましたが、その向こうにはもっとたくさんの方があったことでしょうか。コロナ禍でいろいろな場面があったと思いますが、それを越えてつながっていかうとしたその壮大なエネルギーが、今日こういうセッションという場でひとつにまとまって俯瞰できたことを大事にしたいと思います。

それから、関係性の中から課題が生まれているということや、情報は命をつなぐ、地域を温めるなど、いろいろな言葉も出てきました。そういう各地での真剣で誠実な取り組みの中からしか生まれない言葉、知恵がギュッと集約して生まれた言葉が印象的でした。実は強制避難のあった福島県富岡町で、今は2割程度の住民が戻っています。その中で語り部の活動をされている人がいますが、比較的高齢で、今まではつながりが大事だと言われてきたのに、語り部の全ての講演が中止になり、むしろつながるなと言われて大変だと相談がありました。しかし、その人たちがPC通信を始めた。すごいねと言ったら、よくよく聞くと、郵便はがきを何十人かいる語り部のメンバーに10枚セットで送り、1日の中で思ったことを文章や俳句、絵などにしてポストに投函してもらおうというものでした。それが事務局に届いたら、大きな紙に貼り付けて、もう1回全部コピーして再び会員に送るのです。PC通信というのは、ポストカード通信のことでした。我々が想像もできないアナログな手法ですが、それをやると。知恵から生まれた言葉というのは、そういうことなんだと思いました。

今日は長野の各地の取り組みやドラマを、ふるさととは一体何だろうと思いつつ聞かせていただきました。そして、ふるさととは場所ではなく、その地域における人と人との関係性のことではないかと気づかせていただきました。



加山 弾さん(東洋大学教授)

今日は全体的にすごくポジティブな、教育と福祉のコラボレーションによる突破力のようなものを感じました。やりたかったけどやっていなかったこと、できていなかったこと、コロナで諦めていることをやってみるという、エネルギーに満ちたディスカッションだったと思っています。

私はソーシャルワーカーの社会資源開発に特に興味を持って研究してきましたが、最近、そのテーマで講演依頼をいただく機会があり、滋賀県社協と三重県社協でお話してきました。そこと結びつけると、資源開発は、教科書的にはハードとソフトの開発があると言っていました。ハードは居場所づくりや活

動拠点づくり、ソフトはプログラムや事業をつくっていくというものです。しかし、コロナ以後、ネットワークの開発も資源開発だと感じています。東京都での事例ですが、もともとコロナ前から複数の社会福祉法人の地域公益活動のネットワークができていました。その中で、シングルマザーの方が、学校が休校で子どもが家にいるので、仕事を休んで子どものお世話をしなければいけなくなり、ますますお金に困窮する上、1日1食、給食だけが唯一、栄養バランスがよい食事だったのに、それができなくなったというお宅がありました。その状況を受け、ある特養を運営する法人が、もともと利用者の昼食を作るの

で、キャパシティ的に20食+αなら作れるということ、ほかの法人はお弁当が必要な人に届ける配達をするというかたちで協力関係が広がりました。その間に社協が入り、法人が持ち出しにならないよう、補助金を出して食事を作れるようにしたり、希望者に弁当の宅配を周知した結果、社協のネットワークを生かして食材を寄付して下さる近所のお店も出てきました。ネットワークがインフラのようになり、コロナの危機に対抗する大きな力として花開いたのです。このように、コロナ前につながっていなかった法人やお店、ボランティアの方もつながったことは、コロナ後も残っていく財産だと思っています。

そういう意味でいうと、資源開発には、ハードの立ち上げとソフトを生み出すことのほかに、ネットワークを作って残していくという3つがあると思います。今日お話を聞いたことは、まさしくハードを生み出すきっかけでもあるし、ソフトやネットワークをつくることでもあります。ぜひ今後長く残り、次世代に受け継がれていけばいいと思っています。

今日は理念的なところがすごく共有されたと思います。教育も福祉もそれ以外の方も同じ思いを共感できたことはすごく大きな財産です。それを今度はいかに方法論に置き換えるか、仕組みを生かしていくか。そのための計画作りは、特に社協の皆さんが得意かと思います。地域のアクションプランや一人ひとりの次のステップ、理念を行動に移していくプロセスのつながりがあってもいいのかなと思います。

また、改めて感じたのが、社会教育も、地域福祉も、出発点は一緒だということです。やはり、地域離れの時代にあっても、人を大事に思いたい、犯罪や事故や災害などいろいろなものから困っている人を救い出したいという人に対する温かい眼差しの出発点は一緒で、良い地域であり続けたいという思い

があると考えると、出口も一緒だと思っています。行政機構は、やはり教育と福祉、医療や住宅、それぞれが縦割りになり、それが必要なことですが、住民は横の理屈で動いているので、横につながるの社会教育であり、福祉教育ではないかと思い巡らせていました。ボランティアをする住民とされる住民、全ての関わっている住民、あるいは関係者の方々が、先生であり生徒でもあります。その学び合いが生まれる中で、思いが共有され、共感され、協働に発展するという話がありましたが、対話して一緒に共有していくきっかけが教育ではないかと思いました。

もうひとつは、天野先生の公民館の成り立ちの話が本当に勉強になりました。やはり長野県は公民館の先進地であり、歴史から勉強できたことはすごくよかったです。鳥根県松江市も公民館王国として有名で、やはり公民館ごとに社会教育主事がいて、さらにソーシャルワーカーも配置されていて、何かあったらすぐに対応できる関係をつくっています。松江のことも考えながら聞かせていただきました。

地域福祉は今、大きなチャンスでもあり、過渡期でもあります。重層的支援体制整備事業が2020年の社会福祉法改正で盛り込まれたことをご存知の方が多いと思いますが、重層的というのは市町村の任意事業ながら、やはり社協や民生委員、住民のボランティアの方々が主役となっていくものです。それぞれの専門分野をすり合わせていって、無理や無駄なく効果的に連動し、医療教育、住宅、就労、様々なものコラボレーションして発展していくこと。公民館のことを勉強し、ひとつの起点にして、いろいろなものを重ね合わせていけるようなことができればいいのではないかと期待も込めて聞きました。



傳田 清さん (NPO ホットライン信州・信州子ども食堂ネットワークスタッフリーダー)

今日は本気の志を持った方たちが集まって、長野県を変えるきっかけの1日となる雪だるまの核のようなものをつくれたと思っています。長野県には77の市町村の中に社協や3800ヵ所の公民館があり、それぞれで10人ほどが働いていれば全部で4万人くらいになります。また、ボランティアをされている方が長野県に3万人、NPOや社会福祉法人関係者を含めると、10万、20万人という数になります。その人数が動いたら長野県は変わるでしょう。今日はま

だまだ小さな核かもしれませんが、私たちがその核になった雪だるまから仲間を増やして転がして行って、でっかいビッグ雪だるまを作りたいと思います。今日のフォーラムがものすごいパワー、団結力になり、長野が非常に楽しみになる1日になったと思います。



長野県まちづくり・ボランティアフォーラム 2021

(日本地域福祉学会 関東甲信越静部会地域福祉セミナー)

～学びから実践へ 協働で取り組む“まちづくり”～

発行／社会福祉法人 長野県社会福祉協議会

〒380-0936 長野市中御所岡田98-1

Tel : 026-226-1882 Fax : 026-227-0137

Mail : vcenter@nsyakyō.or.jp

HP : <http://www.nsyakyō.or.jp>

制作／合同会社 ch.

印刷／有限会社サンライズ

本誌掲載の写真・図版・生地等の無断複写・転載を禁じます。

